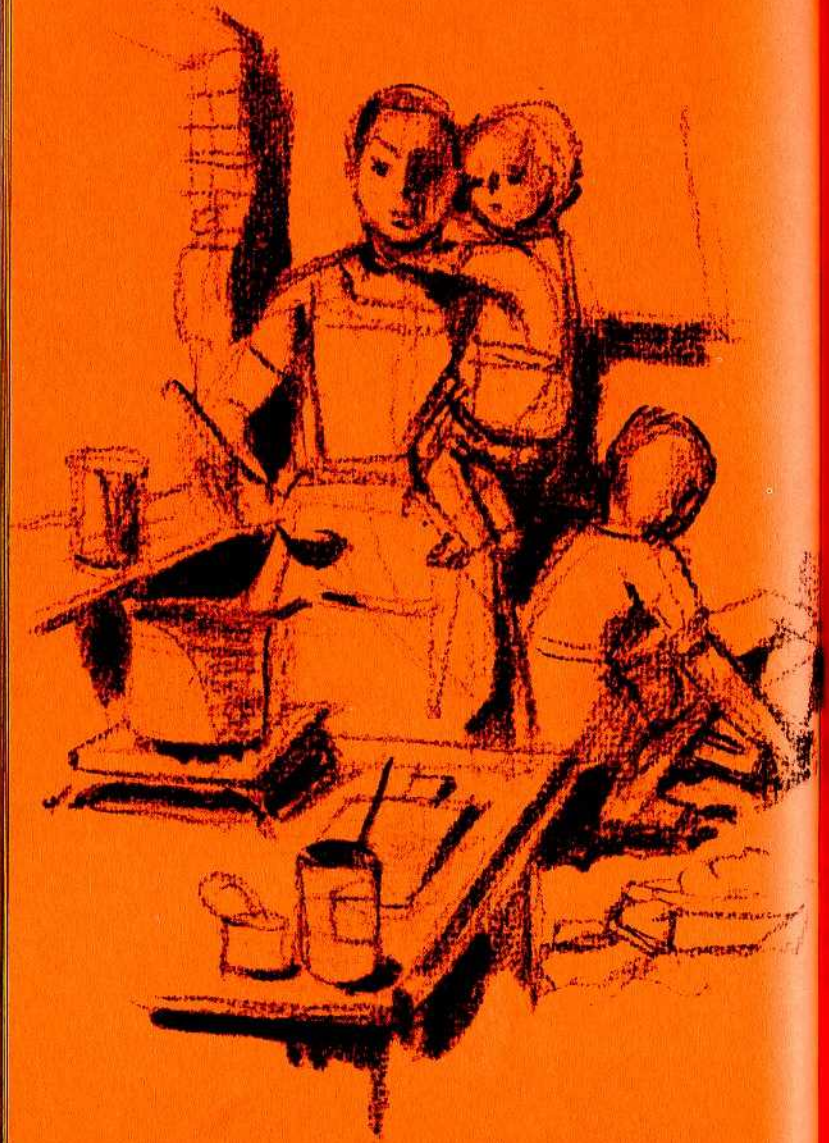


遅かれ早かれ、われわれが巻き込まれるこの戦争について想像してみよう。

戦争は、残虐、破壊、死、そして火によって、そのすべての重圧をわれわれに加えてくるだろう。その強さ、残忍さは、筆舌に尽くせない。

それは、われわれを容赦なく踏みにじるだろう。戦争は、嵐が草木を打ちのめすように、われわれを打ちのめすだろう。

持ちこたえなければならないのは軍隊だけではない。全国民は、軍隊の背後で抵抗しなければならない。軍隊は、その背後に国民の不屈の決意があることを感じたとき、初めてその任務を完全に遂行できるのだ。

奇　襲

地方新聞から抜萃：

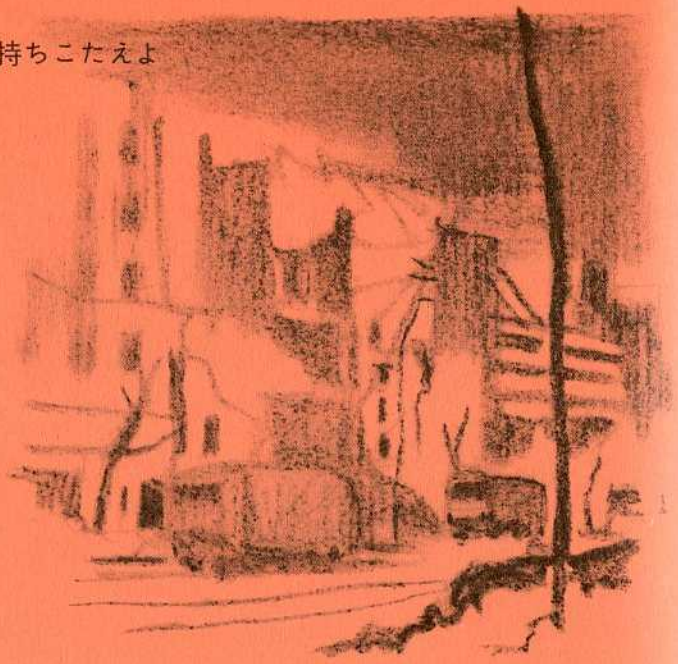
午前6時ちょうどに、最初のロケット弾が町に落ち、猛烈な爆発を伴って、22分間にわたって約800発が続いて爆発した。これによって町の中心部がほとんど完全に破壊され、工業地帯、駅、水力発電所も徹底的にやられた。

敵は、町を占領するつもりらしく、原爆は使わなかった。彼らは自分自身のために放射能を恐れているのだ。

人命の損失は、さほど大きくないようだ。警報がうまく伝達されたので、住民は避難所へ入ることができ、幾千という人命が救われた。

しかしながら、物質的被害は大きく、大部分の区域では、ガスも、電気も、水道もとまった。爆風と火から免れた家は、ススとホコリが一ぱいになったが、民間防災組織が大活躍をして、火事を消し、負傷者に繃帯を巻き、建物の残がいの下敷きになった不幸な人々を助け出した。民間防災組織は、対空防衛隊の助けを得て、災害と戦ったのである。

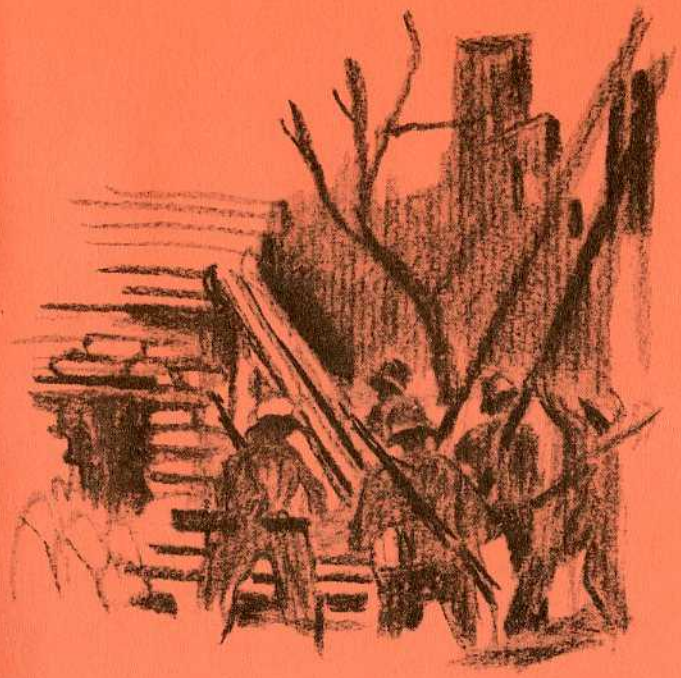
町の印刷所は大きな被害を受けたが、われわれは、各印刷所の協力によってこの新聞を発行する。何故ならば、すべての人がこの町で何が起こったかを知りたいはずだからである。今日は、ただ、読者に最悪の事態はすぎたのであり、頑張る必要があるとだけいいたい。



この奇襲は、町のすべての防衛手段を麻痺させようとしたものであるが、軍の指揮官は、不意打ちされるままにはなっていなかった。その日の夜から、彼らは町を――その半分は破壊されたが――要塞につくりかえ始めた。

予想される侵入路の要所々々の防衛を強化するために夜通し働いた。1時間1時間ごとに、これらの廃墟は難攻不落の拠点に変わっていく。無防備の道路には地雷が仕かけられ、対戦車砲は偽装されて、うまく隠された。有刺鉄線の網が至る所に張りめぐらされた。

これらの準備が暗闇の中で夜中じゅう行なわれ、住民は、やがてやってくる第2の試練を避難所の中で待っている。



防衛態勢に入った市町村のうちで、軍隊が戦闘に備えて駐屯している地域は、現在、軍の指揮下に入っている。作戦地域の軍の指揮官は、軍隊と民間防災組織との間の協力がうまくいくように努める。

地域防災長は、軍の対空防衛隊の指揮官と協力して、新しい措置を決定した。住民は戦闘地域から立ち退く。防衛に直接関係のない人は、できれば戦場外の安全な地域に集められる。民間防災組織は糧食の補給に従事する。

敵は国境地帯にあるわが領土の幾つかの地域を占領した。敵は巧妙な手段を用いて、あちこちでわが第一線を越えたが、わが防衛体制全体を大きな危険に陥れてはいない。重要な地域においては、わが軍は敵の激しい攻撃を押し返した。

突然の激しい攻撃によって、国民のモラルは一時ぐらついたが、今、それは回復した。新聞とラジオは、客観的に情報を伝えている。連邦政府はその所在地を移転した。ベルンは、敵の爆撃に対してあまりにも都合のよい標的を提供しているからである。

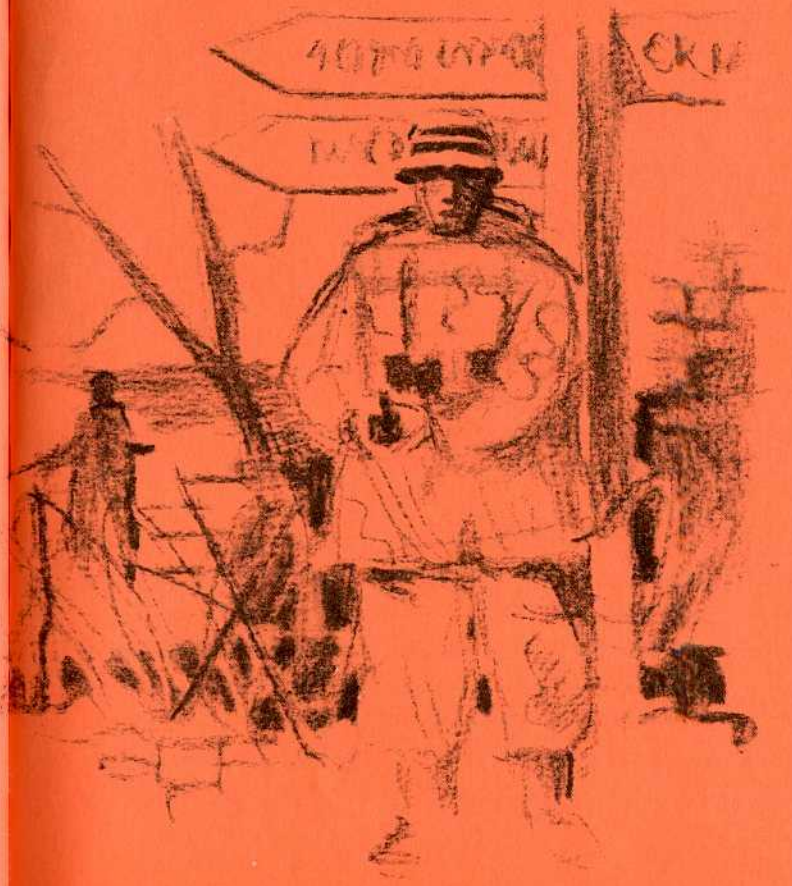
国の中心部に新たに設置された事務所から、スイス大統領は国民に対して、そのとるべき行動を指示し、国民の勇気に訴え、嘘の情報に対して警戒するように呼びかけている。降伏宣言は敵が謀略で流す以外にはあり得ない。

連邦内閣と軍の総司令官は、われわれの徹底的抵抗の意志を確認している。これと矛盾することは、すべて外国からの宣伝行為であり、インチキであり、ワナである。

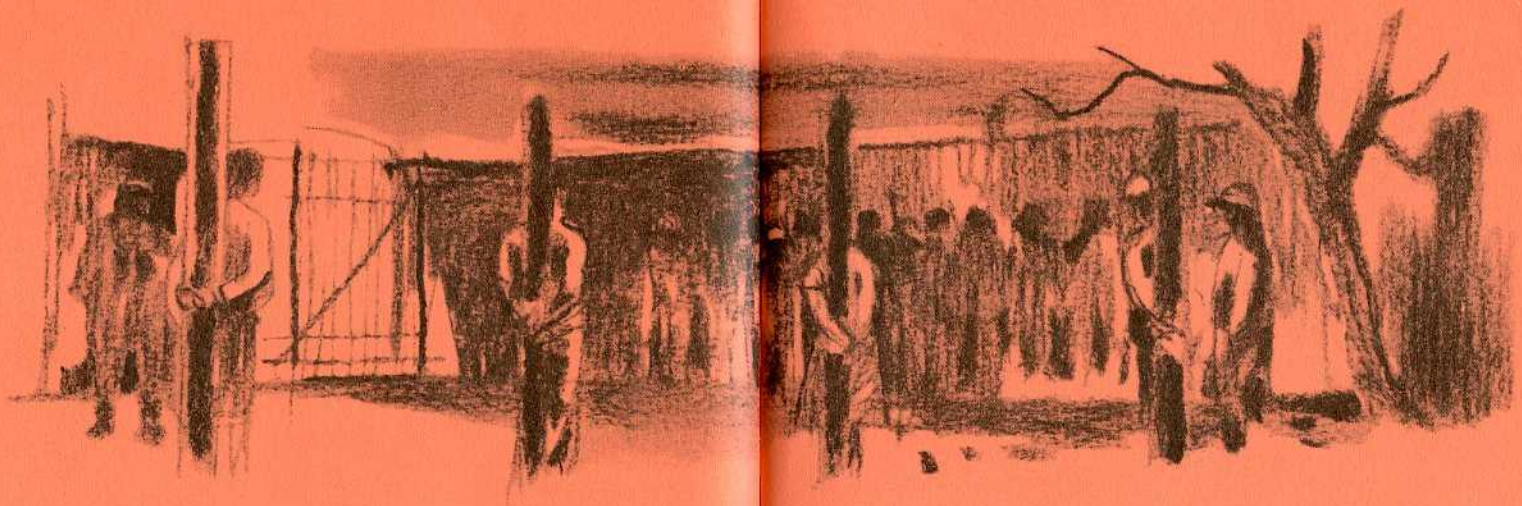
各人がそれを知り、各人が最高の犠牲に備えなければならない。

わが軍は有効に戦っている。戦闘地域における行政機関と軍との協調関係は完全である。

国民は避難所を離れない。戦闘地域においては、軍の指揮官が国民に対して、いかに行動すべきかを命令する。行政機関は、発令される措置の実施に責任を持ち、これに関連する命令を下す。



戦時国際法



戦争そのものは、戦時国際法によって規制される。

1. 戦時国際法は、軍服を着用し、訓練され、かつ、上官の指揮下にある戦闘員のみに対して適用される。

2. 民間人および民間防災組織に属するすべての者は、軍事作戦を行なってはならない。孤立した行動は何の役にも立たない。それは無用の報復を招くだけである。

3. 軍隊または民間防災組織に編入されていない者で国の防衛に参加協力することを希望する者は、地区の司令官に申し出なければならない。彼は軍服あるいは少なくとも赤地に白十字の腕章を着けることになる。

4. 住民は、捕虜に対して敵意を示す行為を決して行なってはならない。いかなる立場の下でも、負傷者および病人は、たとえ敵であっても助けねばならない。

これに反して、スパイ、平服またはにせの軍服を着用した破壊工作者、裏切者は、摘発され、軍法会議に引き渡される。彼らは、戦時国際法に従って軍事法廷で裁かれるであろう。

5、軍事施設、橋、道路、鉄道線路の破壊、産業施設を使用不能にすること、食糧の備蓄を中断すること、これらは、すべて軍命令によってのみ行なうことができる。自分の判断でこのような行為を行ない、あるいは行なおうとすることは、非合法な行為である。

6. すべてのスイス人は、男も女も、軍に属しているといなとを問わず、その身体、生命、名誉が危険にさらされるときは、正当防衛の権利を有する。何人もこの権利を侵すことはできない。

最後まで頑張る

われわれは、数と装備の劣勢を、固い防衛の決意で補おう。いかなる裏切行為も許されない。また、耐え切れないから降伏してしまおうというような気持も断固抑えねばならない。

住民と軍隊は、破壊されたこの町を要塞にしようとして働いているが、その努力の中に彼らの固い決意を見て取ることができる。すべての人たちが、敵が乗りこえることのできない障害物を構築するために、一つの地域の要塞化を進めている。廃墟そのものも防衛に利用できるのだ。

爆撃に抵抗するために、できるだけ地下深く潜ろう。

時期が来れば、われわれは、穴から出て侵略者を攻撃する。民間防災組織は、その任務に従って全面的防衛に参加する。

謀略放送を警戒せよ

砲撃は真夜中に再開された。ロケットの飛ぶ音を聞いて、人々は避難所に入った。

弾着のにぶい音がして、夜の空気が震動する。家々が崩れ落ちる。

砲撃は数時間続く。日が昇ろうとしている。各人はラジオを通じて与えられる指示を待っている。ラジオは国営放送の周波数に合わされている。

ラジオが放送を始めた。

国民に告げる：

わが軍司令官は、敵の司令官から、攻撃を4時間中断するとの約束を取りつけた。この時間を利用して、各人は直ちに避難所を出、あらゆる手段によって内陸部へ、アルプスの方向へ行くように。

このような状況のもとで、この地獄から脱出することができるだろうか。

その上、われわれはこの放送の声を聞いたことがない。この命令が何と不明瞭なことだろう。よく考えてみると、おかしいことが多い。この命令は、われわれが今まで聞いてきた命令と違うようだ。

この命令に従えば、われわれは避難の混乱の中で敵の爆撃によりばらばらにされかねない。

また、わが軍に対する侵入軍の盾として使われかねない。気をつけよう!!

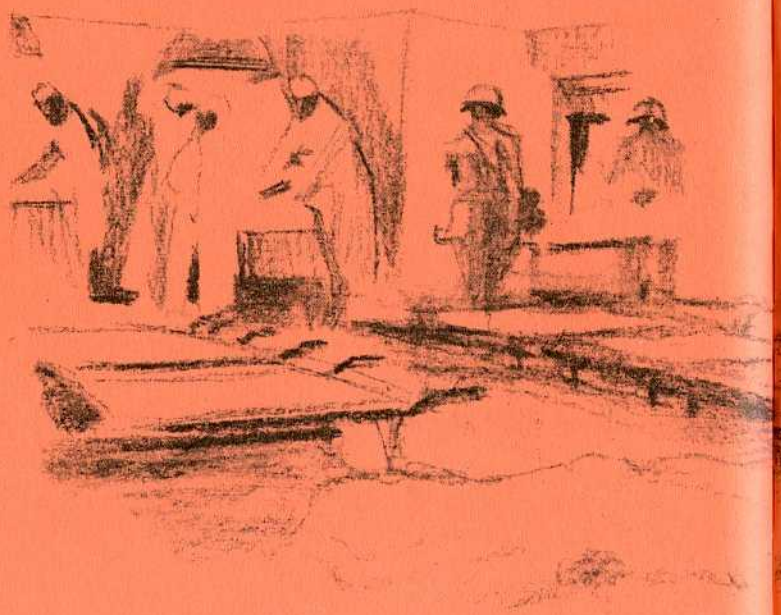
国民に告げる：

われわれを滅亡させようとしている者に乗ぜられないように。

これらの情報はにせものである。放送が妨害されたとき、知らない声で話しかけてきたときは、警戒しよう。

わがアナウンサーの声は、今の放送の周波数のすぐ隣りで聞けるのだ。

警戒しよう。われわれの放送のみを聞くべきである。



夜間の激しい砲撃は、夜明けの攻撃の前ぶれである。敵は何が何でも突破しようとして、わが防衛線にぶつかってくる：わが軍の大砲に、戦車に、地雷に、対戦車火器に、歩兵に、空軍に——わが破壊力に……。

住民は、避難所内で、どうすることもできずに、砲弾、爆弾の轟音、手投弾のパッと光る炎、機関銃のカタカタと鳴る音によってそれとわかるだけのこの戦闘が身近に行なわれていることを知るのみだ。地獄のざわめきが、地の底深くしみ入る。

ああ！　あちこちで避難所は直撃弾の下に崩れていく。ある地下室は全滅した。

これが戦争の現実だ。生きようと思えば戦わなくてはならない。

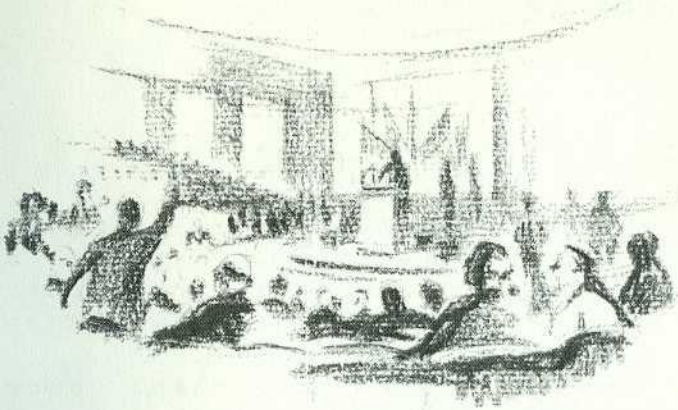
民間防災組織もまた、火災、洪水、窒息の危険に対して着実に闘っている。

民間防災組織と軍の対空防災隊は、至る所で活動している。衛生班は休むことなく働いている。戦いは最高潮に達しようとしている。戦争は筆舌に尽くしがたい恐怖である。そのことを知り、そして、それに備えなければならぬ。

われわれが軍事的な試練を避けられるよう期待したい。近代の破壊的戦争は、それを開始した者にも被害を与えずにおかない。だから、われわれの敵が別の手段を選ぼうとすることもあり得るのだ。

戦争のもう一つの様相

裏切り
敗北主義と平和主義
愛情をよそおう宣伝
威嚇による宣伝
経済戦争
スパイ行為
破壊活動
政治機能の解体
テロ
クーデター、外国の介入



戦争のもう一つの様相は、それが目に見えないものであり、偽装されているものであるだけに、いっそう危険である。また、それは国外から来るようには見えない。カムフラージュされて、さまざまの姿で、こっそりと国の中に忍び込んでくるのである。そして、われわれのあらゆる制度、あらゆる生活様式をひっくり返そうとする。

このやり方は、最初はだれにも不安を起こさせないように、注意深く前進してくる。その勝利は血なまぐさくはない。そして、多くの場合、暴力を用いないで目的を達する。これに対しても、また、しっかりと身を守ることが必要である。

われわれは絶えず警戒を怠ってはならない。この方法による戦争に勝つ道は、武器や軍隊の力によってではなく、われわれの道徳的な力、抵抗の意志によるほかない。

ヨーロッパ征服を夢みる、ある国家の元首が、小さなスイスを武器で従わせるのは無駄だと判断することは、だれにも納得できる話である。単なる宣伝の力だけでスイスをいわゆる「新秩序」の下に置くことができると思われるときに、少しばかりの成果をあげるために軍隊を動かしてみたところで、何の役に立つだろうか。

国を内部から崩壊させるための活動は、スパイと新秩序のイデオロギーを信奉する者の秘密地下組織をつくることから始まる。この地下組織は、最も活動的で、かつ、危険なメンバーを、国の政治上層部に潜り込ませようとするのである。彼らの餌食となって利用される「革新者」や「進歩主義者」なるものは、新しいものを待つ構えだけはあるが社会生活の具体的問題の解決には不慣れな知識階級の中から、目をつけられて引き入れられることが、よくあるものだということを忘れてはならない。

数多くの組織が、巧みに偽装して、社会的進歩とか、正義、すべての人人の福祉の追求、平和というような口実のもとに、いわゆる「新秩序」の思想を少しずつ宣伝していく。この「新秩序」は、すべての社会的不平等に終止符を打つとか、世界を地上の楽園に変えるとか、文化的な仕事を重んじるとか、知識階級の耳に入りやすい美辞麗句を用いて……。

不満な者、欺かれた者、弱い者、理解されない者、落伍した者、こういう人たちは、すべて、このような美しいことばが気に入るに違いない。ジャーナリスト、作家、教授たちを引き入れることは、秘密組織にとって重要なことである。彼らの言動は、せっかちに黄金時代を夢みる青年たちに対して、特に効果的であり、影響力が強いから。

また、これらのインテリたちは、ほんとうに非合法な激しい活動はすべて避けるから、ますます多くの同調者を引きつけるに違いない。彼らの活動は、“表現の自由”の名のもとに行なわれるのだ。

社会進歩党の機関新聞の記事：

昨夜、カジノの大広間で、社会進歩と平和の擁護を目ざすわが党が結成された。“悲惨に対する闘い”は、まだほとんど成果をあげていない。心ある人々は、このような高潔な任務に献身することを、自己の義務としてみずからに課するであろう。

列席者の中には、第一線で活躍している人々の顔が数多く見えた。

この集会における大きな収穫と言えるのは、X教授から、多くの若者たちが有益な報告を聞くことができたことである。その報告においてX教授は、退嬰主義のレッテルを張られ、最も反動的な資本主義の不正義と結びついたわが国の伝統的政治と、たもとを分かつ必要性がある旨を述べて、若者たちを納得させた。

他のもう一つの新聞記事：

昨夜、X教授の報告をカジノで聞いた。この報告は、世界平和のための闘いと社会進歩を目ざす、ある新しい政治団体への参加を呼びかける集会でなされたものである。事実、この2つの目的は、心ある人すべての関心を引くものであって、その限りにおいては、われわれも賛成である。しかしながら、その目的の裏には、理想主義的活動の名のもとに、偽装された「新秩序」の宣伝が隠されていることが明らかだ。

これは、わが国の国家制度を内部から崩し、新しい政治体制の樹立を目標とする企てであるが、彼らの唱える政治体制が樹立された国では、どこでもあらゆる形の自由がなくなり、新特権階級が生れ、また、世界の平和を絶えず危うくする。

いつになったらわが国にいる「新秩序」を信奉する者は、彼らが説く教えと、彼らがわが国に導入しようとするイデオロギーが具体的に実現したこととの間に、深い溝が存在していることを、理解するのだろうか。

敵は同調者を求めている

わが党の結成は、大した評価はうけなかったが、これはわれわれに有利であった。事実、わが党結成の重要性は、最初の参加者の数が限られていたという面からのみ評価された。このような単純な考え方は、われわれの目的に役立つものである。

われわれは、われわれの目的に賛成する幾人かの知識人を仲間に引き入れることができた。その中の一人であるX教授は、国家的名声を持ち、われわれの活動が都合よく運ぶのに役立つ権威を持っている学者である。

全体として、この国の国民は、福祉政策によって眠らされており、彼らの伝統的制度が、他のあらゆる形の体制に優越するものであることを確信しているので、われわれが恐れていたような反応は全くない。われわれの組織は順調に活動している。

われわれは、新党の党首にJ氏を据えた。彼は頭脳明晰、かつ、活動家であるが、野心に取りつかれ、非常に金を欲しがっている。彼の属していた保守党は、彼に微かな希望しか与えなかったので、じっと控室で自分の出番を待つ代りに、彼はついに性急な道を選んだのだ。彼は、仲間からは決定的に排斥されてしまったので、今や、成功するためならどんなことでもするだろう。それ故、われわれの活動は順調に進んでいる。

社会進歩党は国を裏切るだろうか

社会進歩党は、その活動を禁じられてはいない。われわれの民主主義が、禁ずることを欲しないのである。思想の自由、結社の自由は、わが憲法によって認められている。全体主義国にはこのような寛容さは全然ない。全体主義国は、知識人、学者、芸術家を監視し、必要に応じて刑務所に入れる。いずれにしろ、公けのイデオロギーに反する思想は一切発表させないのだ。

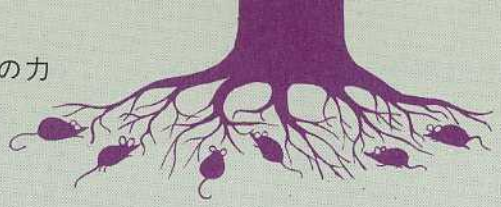
われわれには同じやり方はできない。ただ、いわゆる“自由”と呼ばれるものが、いつ、国を裏切る端緒となるかを知る必要がある。“自由”には、そのおそれがある。

われわれの国家と制度に対する客観的批判は必要である。その批判によっていろいろな改革がもたらされ、公共の福祉を重んずるわが国の制度が改善されるから。しかし、それが必要だとしても、その批判が組織的な中傷になれば、忌わしい結果を招き、また、われわれの防衛潜在力を弱めることにもなりかねないのである。

民主的自由の伝統に反するイデオロギーをわが国に導入しようとする者は、国の利益に反する行動をしているのだ。

しかしながら、今のところ社会進歩党は、疑わしくはあるが、決定的な反国家的活動の証拠を見せているわけではない。

外国の宣伝の力



国民をして戦うことをあきらめさせれば、その抵抗を打ち破ることができる。

軍は、飛行機、装甲車、訓練された軍隊を持っているが、こんなものはすべて役に立たないということを、一国の国民に納得させることができれば、火器の試練を経ることなくしてうち破ることができる……。

このことは、巧妙な宣伝の結果、可能となるのである。

敗北主義――それは猫なで声で最も崇高な感情に訴える。――諸民族の間の協力、世界平和への献身、愛のある秩序の確立、相互扶助――戦争、破壊、殺戮の恐怖……。

そしてその結論は、時代おくれの軍事防衛は放棄しよう、ということになる。

新聞は、崇高な人道的感情によって勇気づけられた記事を書き立てる。

学校は、諸民族との間の友情の重んずべきことを教える。

教会は、福音書の慈愛を説く。

この宣伝は、最も尊ぶべき心の動きをも利用して、最も陰険な意図のために役立たせる。

不意を打たれぬようにしよう

このような敵の欺瞞行為をあばく必要がある。

スイスは、征服の野心をいささかも抱いていない。何国をも攻撃しようとは思っていない。望んでいるのは、平和である。

しかしながら、世界の現状では、平和を守り続けるためには、また、他に対する奉仕をしながら現在の状態を維持するためには、軍隊によって自国の安全を確保するほかないと、スイスは信ずる。

近代兵器を備えた大国に立ち向かうことはわれわれにはできないという人々に対して、われわれは、こう答えよう。――経験は、その逆を証明している、と。

今日では、一つの動乱が、多数の国を巻き添えにすることは決定的である。それ故、われわれは、単独で攻撃の重圧に耐えねばならぬこともないだろうし、攻撃者は、その兵力の一部分しかわれわれに向けられないだろう。そして、このような部分的な兵力に対してならば、われわれは、対等の兵力で反撃することができる。

また、技術の進歩によって、地上では軍隊をまばらに展開することが必要となったが、このことは、われわれにとって有利な条件である。われわれの防衛は、これによってきわめて容易になった。

潜在的な敵はわれわれに武器を捨てさせるためには、わが国を征服する必要度に比してケタはずれに大量の武力を浪費する必要があることを知っている……。

第一次大戦において、また、第二次大戦において、われわれが攻撃を免れたのは、偶然によるものではない。この幸い、それは、みずからを守ろうというわれわれの不屈の意志と、わが軍隊の効果的な準備とによるものである。

また、1939年～40年におけるフィンランドの例や、1956年や67年におけるイスラエルの例も、われわれの考えが正しいことを証明している。これらみずからを守った小国は、その国家的存在を保つことができたのである。

そして美しい仮面をかぶった誘惑のことばを並べる：

核武装反対

それはスイスにふさわしくない。

農民たち！

装甲車を諸君の土地に入れさせるな。

軍事費削減のための

イニシアティブを

これらに要する巨額の金を、
すべてわれわれは、
大衆のための家を建てるために、
各人に休暇を与えるために、
未亡人、孤児および不具者の年金を上げるために、
労働時間を減らすために、
税金を安くするために、
使わなければならない。
よりよき未来に賛成！

平和のためのキリスト教者たちの大会

汝　殺すなかれ

婦人たちは、とりわけ、戦争に反対する運動を行なわなければならない。

（平和擁護のためのグループ結成の会）

平和、平和を！

世界とともに平和に生きることを欲しないスイス人があろうか。戦争を非としないスイス人がいるだろうか。われわれが軍隊を国境に置いているのは、他の国がわれわれを平和に生きさせておいてくれるためである。

人類の幸福は、われわれにとって重要なことだ。われわれは力の及ぶ限りそれに貢献している。たとえば赤十字の活動、開発途上国に対する援助、戦争状態にある国の利益代表など。ところが、現実はこのとおりである。

それを知らないとしたら、われわれは、お人好しであり、軽率だということになるだろう。われわれを取り囲む国々が武装し続ける限り、われわれは国家の防衛を怠ることはできない。

ヨーロッパで対立する交戦国によるスイス攻撃の可能性を、われわれは、最近の二つの大戦の経験にかんがみて、よく考えなくてはならない。

潜在的な敵を仮定――その宣伝文句に基づいて判断することは、たとえその宣伝文の中に、聖書の文句が引用されていようとも、できないことだ。われわれは、にせ平和主義者たちが、武装するのをやめないでいることを確認している。われわれの信念は誠実なものである。われわれは、だれ一人殺そうとするつもりはないが、ただ正当防衛を確保しなければならぬ。

われわれが武器を使用せざるをえないようなことがないように！
われわれは、これ以上に真摯な願いを持たない。

敵は意外なやり方で攻めてくる

ある国家元首の「政治的告白」と題する著書から：

《われわれは、勝利に到達するまでわが道を倦むことなく歩み続ける。われわれは敵を憎む。彼らを容赦なく滅ぼそう。武器による戦いに比べ費用のかからぬやり方で、敵を滅ぼすことができるのだ。「魅力」で魅きつける宣伝は、われわれの手の中にある効果的な武器だ。われわれは、われわれの意図するところを、美しい装飾で包み隠さなくてはならない。文化は立派な隠れみのに利用できる。

音楽、芸術、旅行などの口実で、仲間をつくろう。展覧会とスポーツの祭典を組織し、利用しよう。わが国に旅行者を引き寄せ、彼らにわれわれの優越性を納得させよう。これらの「文化交流」は、事実は一方通行としなければならぬ。わが国に、われわれの教義や生活様式にとって好ましくない退廃的思想、新聞、書籍、映画、ラジオ放送、テレビ放送の、どのようなものも入れさせないようにしよう。

科学の面では、できるだけ多く受け取り、少なく与えるようにしよう。彼らは愚かで退廃的だから、われわれの企てのなすがままになるだろう。われわれが彼らに与えるフリをすれば、いい気持になってしまうだろう。彼らは、われわれの政治的思想は信じまいとするが、だんだんそれに侵されていくだろう。このようにして、われわれは、彼らの心をとらえていく。彼らはワナに陥り、われわれは、彼らの首に彼らを締めつける輪をかけるのだ……。》

自由と責任

民主主義は個人の意見を尊重する。これが民主主義の最も大きい長所の一つである。

民主主義国家では、個人の私的な言行にまで介入することはない。報道、ラジオ、テレビは自由である。各人は、平時には少しの困難もなく外国へ行くことができる。各人は、自己の気に入った政党を選ぶことができる。“自由”が空虚なことばでない国、自由の内容がちゃんと充実している国では、このようになっている。

しかし、国家は共同社会を守らなくてはならない。そのため、国家は、特にスパイ行為と戦う義務を持つ。スイスには思想に関する罪というものはないが、しかし、われわれの防衛力を弱めようとする連中は、監視しなければならない。内部から国を崩壊させようとする作業が、公共精神を麻痺させる者によって企てられる可能性が常にある。

自由はよい。だからといって、無秩序はいけない。

故に、国家的独立の意志をなくしてわれわれを弱体化させようとするイデオロギーに対して、人々の注意を喚起する必要がある。教育者、政党、組合、愛国的グループなど、世論に影響を及ぼす立場にある人々は、すべて、みずからの責任を絶えず自覚しなければならない。

敵はわれわれを眠らそうとする

ある国家元首の演説から：

《…われわれが持っている望みは、たった一つ。すべての人と平和的に暮らし、人類の幸せのために協力することである。
それは、わが国民すべてが胸に抱いているものである。

このために、われわれは日々経済力をつけているのだ。わが国民一人一人が、やがて、自分の家と、テレビ・セットと、自動車を持つようになるだろう。

われわれは、すべての国と、商業的かつ文化的関係をつくり上げたい。貧しい人々の生活水準を向上させるのを援助しよう。彼らに進歩への道を示してやろう。

われわれは、ある国々が、すべての軍事的競争をやめる必要があることを、いまだに理解しないのを残念に思っている。これらの国々が、われわれの例にならって、世界平和の確保のために彼らが努力することを、切に望むものである。》

われわれは眠ってはいない

われわれは、この外国元首の演説を聞いた。彼は、われわれに対する善意を保証する旨を述べている。しかし、われわれは、また、彼の著書、すなわち「政治的告白」をも読んでいる。

われわれは、そのときから、彼のこのような宣言をどのように評価しなくてはならないかを知っている。

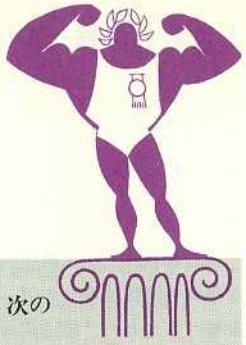
また、われわれは、全体主義大国の戦争準備のために衛星国に要求される役割を知っている。これら衛星国は、「保護者」のために血を流さねばならず、「保護者」と称する大国は、衛星国を飢えさせ、衛星国の最も優れた肉体的・知的労働者を奪い取ってしまうのだ。

衛星国は、自分たちに関係のない勝利を大国に得させるために奴隷のように働いた上、彼ら自身が持っているものをすべて剝ぎ取られてしまうだろう。

この強制労働の上に、さらに、あらゆる種類の屈辱が加わるだろう。彼らは召使のように取り扱われ、自由世界の破壊に参加しなくてはならないだろう。われわれが衛星国を解放しようとすれば、その試みは、すべて容赦なく押しつぶされてしまうだろう。そして、避難する場所を求めて世界中をさ迷っている無国籍者と、悲惨な運命を共にしつつ逃走を試みることしか、残された道はないだろう。

若者たちは、準軍隊的の組織に組み入れられて、専制者の野望のために容赦なく犠牲にされることだろう。

スポーツも宣伝の道具



ある全体主義国のスポーツ責任者は、次のように訓示した。

1．われわれは、わが国のスポーツマンに対して、わが国旗を守るべきすべての国で、すべての競技に勝つことを求める。
われわれの勝利は、わが政治体制の優越性を証明するに違いない。
2．各スポーツマンは、自己の言行について、わが国民およびわが党に対して責任がある。
3．選手権保持者は、自由な言動をすることはできない。彼は、全人生を勝利の準備に捧げなくてはならない。
4．国際試合に対しては、イデオロギーの点で堅固な者のみを選ぶ。
5．わが代表団は、厳格な規律を持つという印象を各地で与えなければならない。また、代表団は、他国代表とどのような個人的接触をも持ってはならない。
6．オリンピックに選ばれた学生は、2倍の給費を受け、また、試験を免除される。
7．金メダルを得た者は、年金および特権とともに、第2級の勲章を受ける。
8．成果をあげないものは罰されるであろう。

真のスポーツ精神を守ろう

健全な国は、すべて、国の未来をになう若者にふさわしいスポーツを盛んにするよう努めている。

健全な身体に健全な魂が宿るのだ。また、スポーツは、全世界の若者たちの平和的交流を助長する。若者たちは、お互いを知ることによって、お互いを尊敬することを学ぶ。彼らは、世界の未来に対する希望の源である。

しかしながら、スポーツの試合が政治的指導者の宣伝武器になってはならない。自国の運動選手が勝利をかち取ったとき、それを誇りとするのは当り前であるが、この勝利をイデオロギー優越の例と考えるのは、不健全である。

真のスポーツ精神が生み出すのは、攻撃的精神ではなく、敵に対する尊敬の念である。

全体主義国は、イデオロギー宣伝の際に優越性の証拠としてスポーツの成果を用いるが、われわれは、高邁な理想をこのように曲げて解釈することを拒否しなければならない。

われわれは威嚇される

宇宙における新しい勝利

X国によって発射された新宇宙船は永久に飛び続けることができる。ロケットによって補給を受けるので、ほとんど無限の飛行継続を保証されている。これによって、宇宙飛行士が長期の宇宙旅行を行なうことのできる日が近づいたのである。宇宙船の建造者ボメール教授は、記者会見で、彼のつくった機械は技術進歩の上で人類を前進させるから、平和のために大きく役立つだろうと説明した。また、教授は、やがて労働者階級が宇宙で休暇を過ごすことができるようになるだろうと述べた。

ferenz in Tokio bekannt. Die 30 Kriegsschiffe, zu denen auch der Flugzeugträger «Enterprise» gehörte, waren 300 Kilometer nordwestlich von Yamaguchi in Westjapan stationiert.

Neuer Sieg im Weltraum

Aus Z. verlautet, daß der Abschuß eines bemannten Weltraumschiffes gelungen ist, das unbeschränkt lang um die Erde kreisen kann. Dieser Satellit kann durch periodisch abgeschossene Versorgungsraketen im Weltraum versorgt werden. Damit beginnt eine ganz neue Aera in der Weltraumfahrt. Ungeahnte Möglichkeiten haben sich eröffnet. Der Konstrukteur des Raumschiffs, Prof. Bommer, erklärte in einer Pressekonferenz, daß die Errungenschaft ausschließlich friedlichen Zwecken diene und einen großen Fortschritt für die Menschheit darstelle. Es werde bald möglich sein, für breitere Bevölkerungsschichten zu tragbaren Preisen Weltraumfahrten anzubieten.

Tito beim Schah

Teheran, 24. April. ag (AFP) Präsident

このようなニュースは、平和的な人々の気持を乱すものだ。このような力の誇示は、小国を不安にさせる。小国はどうして超大国から自分を守れるだろうか。

小鳥を捕えるワナ

よく考えてみよう。あらゆる進歩は、それが何によるものであっても、自然に対する人類の勝利をしるすものである。

科学的発見は、それを成しとげた名誉を持つ国だけにかかわることではない。われわれはみな人類に属するのであり、発見は、われわれ全部に関係することなのである。

知識の上でわれわれを前進させることに貢献した人々に、拍手を送ろう。

しかし、また、本物とにせ物を見分けることを学ぼう。大国が科学的研究のために、信じられないほどの巨費を投じているのは、平和に役立たせようという意図によるものでないことは確かだ。それは、軍事的防衛の領域で他国に置き去りにされまいとする意図によるのである。

全体主義国の労働者階級はやがて宇宙で休暇を過ごすことができるなどと言われても、だまされないようにしよう。

今日、その労働者階級に与えられている生活条件の実態をよく見、そして、われわれの、この大地の上でのくつろぎと自由の幾日かを、彼らも持てるようになることを祈ろう。

理論は、それが生み出す結果に基づいて判断しよう。

小鳥を捕えるワナに、われわれは、おびき寄せられないようにしよう。

経済的戦争

ある大国元首の「政治的告白」の、もう一つの抜萃：

われわれの経済的・社会的制度は、いつかは、われわれが世界を征服し得るほど優越している。世界征服が、われわれの目的なのだ。だから、われわれの計画の実現に反対するものは、すべて排除する。

世界を征服するということは、われわれが敵に宣戦を布告し、わが軍をもって敵を粉砕するしかないというわけではない。われわれには、同じくらい効果的で、もっと安くつく方法がある。

まず、われわれの物の見方にまだ同調していないすべての国において、われわれに同調する組織を強化拡大せねばならない。そして、地球上のすべての国々において、われわれの同調者たちに、その国の権力を少しづつ奪取させねばならない。

同調者たちがそれに失敗した国では、われわれは永久革命の状態をつくり出す必要がある。混乱の中で、経験と訓練を積んだわれわれの同志は、だんだん頭角を現わしていくだろう。

革命が困難と思われる国においては、われわれが差し出す有利な条件を受け入れようとする、その国の労働者階級の絶望と空腹の状態を、充分に活用しよう。

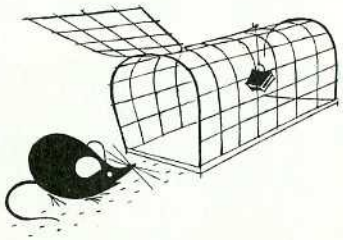
最も経済効率の高い戦法、つまり、最も安あがりのやり方は、常に、あらゆる方法で、その国を経済的沈滞——不景気に陥れることである。腹のへった者は、パンを約束する者の言うことを聞くのだから。

経済も武器である

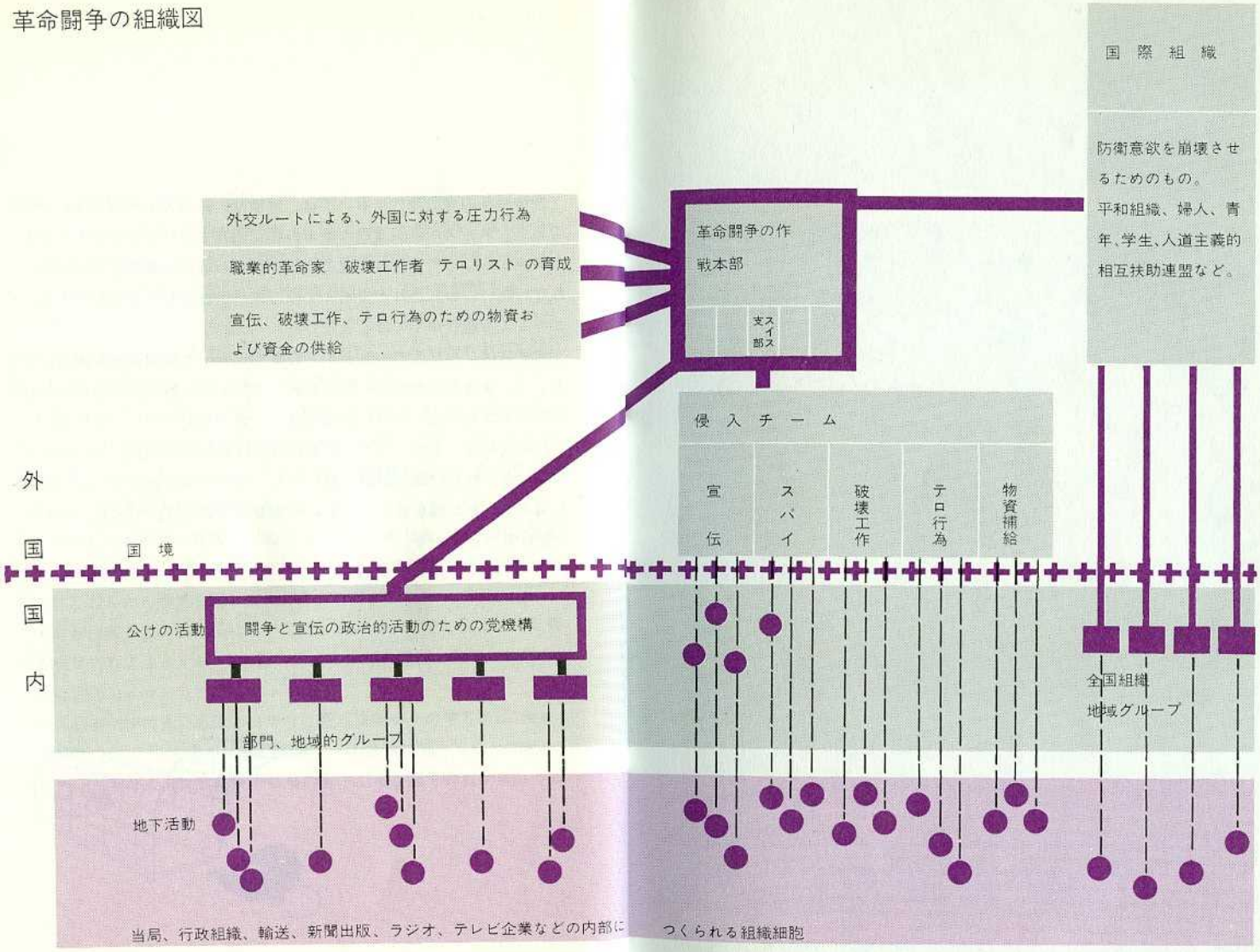
全体戦争の今の時代においては、経済は、政治と戦争の基本的武器である。スイスが経済活動の面で外国に依存する状態にあることは、この点からいって重大な危険である。われわれの攻撃者となるかもしれない国に、われわれが必要とするものの供給を独占させることは、どうしても避けなくてはならない。

スイスは、わが国の中立と安全の要求に合った開放通商政策をとる。そして、潜在的な敵が——われわれの供給する武器を、将来われわれに向けることのないように、当局はわが国の輸出をチェックする。

わが当局は、また、スイス所在の外国商業組織の代表によってなされるかもしれない政治活動に対しても、充分の注意をしている。各個人個人も、わが国を害するおそれのある経済取引は、すべて、みずから避けるべきである。



革命闘争の組織図


国際組織
防衛意欲を崩壊させるためのもの。
平和組織、婦人、青年、学生、人道主義的相互扶助連盟など。
外交ルートによる、外国に対する圧力行為
職業的革命家　破壊工作者　テロリスト の育成
宣伝、破壊工作、テロ行為のための物資および資金の供給
革命闘争の作戦本部
支部
スパイ
侵入チーム
宣伝
スパイ
破壊工作
テロ行為
物資補給
外国
国境
国内
公けの活動
闘争と宣伝の政治的活動のための党機構
部門、地域的グループ
全国組織
地域グループ
地下活動
当局、行政組織、輸送、新聞出版、ラジオ、テレビ企業などの内部に
つくられる組織細胞

敵は、同調者を探す。

敵は、われわれの防衛力を弱めようとする。

敵は、われわれを眠らせようとする。

敵は、われわれをおどそうとする。

敵は、わが経済力を弱めようとする。

われわれは、今日われわれの前に現われている戦争のもう一つの形について語った。

この種のできごとは、われわれの周囲に、われわれの内部に、毎日起こっている。

われわれの運命は、これらのできごとに直面した際、われわれがどう対応するかにかかっている。

明日について考えよう。
われわれの行動の結果を想像しよう。

あるいは　**分裂したスイスは降伏する。**

敵は、われわれの抵抗意志を挫く。
敵は、国民と政府との間に意見の隔たりを生むような種をまく。
敵は、攻撃準備ができている。
敵は、武力行使の道を選ぶ。
敵は、われわれの息の根をとめる。
万事休す。

あるいは　**団結したスイスは、敵を退け、みずからの運命の主人としての地位を維持する。**

われわれの抵抗意志を挫かれないようにしよう。
国民と政府は団結を保つ。
われわれは防衛の準備ができている。
攻撃には反撃で応ずる。
われわれは、敵に乗じられないように戦う。
われわれは他国に追随しない。
スイスは自由と独立を維持する。

敵はわれわれの弱点をつく

われわれに全体主義国の宣伝報道が襲いかかる。そして、われわれを根拠のない悪口と非難で覆ってしまう。それと同時に、われわれに必要な物資の引き渡しが妨げられる。彼らは特に、われわれが彼らのイデオロギーに敵意を抱いていることを非難する。

われわれに対してとられる経済的制裁措置は、わが国の工場における仕事に影響を与える。というのは、この措置によって必要不可欠な原材料の一部分が、わが国に入ってこなくなるからである。

こうして、重大な危機が近づく。

次のような事態が起こる。

諸君が承知している事態が起こった結果、わが社は、9月30日をもって2000人の労働者を解雇せざるを得なくなった。

経営者

スイスは、威嚇されるままにはならない

外国に脅迫されまいと、固い決意をもっている国においては、たとえ経済危機が発生したとしても、国家制度を危険に陥れることなくそれを受けとめることができる。

特定国ないしは特定の国家グループからの物質の供給が断たれることがありうる。しかし、もしわれわれが警戒を怠らず、あるいは特定の国家グループに組み込まれないでいれば、さらにまた、経済協定を自由に締結する余地を残しておいたならば、われわれは、他の国と関係を結ぶことによって損失を補うことができるだろう。

以上のような危機の想定によって、わが国の中立の必要性はハッキリと示される。

こうして、工場の操業縮小による失業者は、公共の工事を行なうことによって吸収できるに違いないし、雇用者と被雇用者とは相互して対立することなく、互いに協力して、満足のいく解決策を求めるだろう。各人は、共同社会全体の利益のために、つまりお互いのために喜んで犠牲を払おう。

こうして、事態は改善される。

諸君が承知している事態が起こった結果、わが社は生産を縮小せざるを得なくなった。しかし、われわれは失業者を出すことを避けるためにできるだけのことをするつもりである。

経営者

混乱のメモ

1月15日	金属工業部門でストライキ。
2月16日	繊維産業部門で激しいデモ。
2月18日	繊維産業部門でストライキ。
5月20日	社会進歩党は、労働とパンのための闘争において、労働者を支援することを約束。 同党指導者と外国の外交官との間の接触が確認された。
6月4日	金属工業部門の労働者代表は、特別集会において組合幹部の退陣を決定。 組合は、社会進歩党幹部の指導を受けることになろう。
6月10日	金属労働者による新ストライキ宣言。
8月15日	わが国から立ち去る義務のある外国人労働者が出発を拒否。工場を占拠。警察が介入したが事態の解決に成功せず。
9月20日	公共輸送機関ストライキ。 秩序回復のため、連邦内閣は軍隊を動員。鉄道労働者の若干は動員命令を拒否。
11月20日	食料品の価格急騰。

健全な労働者階級はだまされない

スイスの各労働組合の代表者が集会を開いて、突如起こった経済の悪化にどう対処すべきかを検討した。

各代表は、この際ストライキを起こすことは、事態の改善にならないばかりでなく、かえって、ますます事態を悪化させるだろうという点で、意見が一致した。

というのは、現在起きている事態は、わが国の資本家のあやまちによって起こったものではなく、それは、ひとえに、ある外国勢力がわれわれをその支配下に置こうとしているからである。工場に座り込みや、ゼネストを行なうことは、事態の解決策になるどころか、その悪化をもたらす以外の何ものでもない、というのである。

今日、雇い主および労働者にとって重要なことは、双方の間の話し合いによって問題の解決をはかることができるし、また、そうあるべきだということである。

このような事態に直面して、すべての者は、自己犠牲を惜しむことなく、スイス国家の団結維持に努めるべきである。

ところが、一方では、社会進歩党のリーダーたちは、あらゆる手段をもって労働者の団体や組織に浸透をはかり、労働者の不満をあおって、いろいろな要求をさせ、混乱を起こそうとしている。

われらスイスの労働者は、外国勢力の指揮の下に行なわれるこのような策謀に、決して乗せられてはならない。

危機に瀕しているスイスに、人をまどわす女神の甘い誘いの声が届く

全体主義国の新聞、テレビ、ラジオは、毎日、われわれに、忠告や、激励や、脅迫を繰り返す。例えばもしも、われわれが全体主義国に味方すれば、彼らは何の不自由もないようにわれわれを助けてくれるだろうといったり、またわれわれが同盟を結べば、その日からわれわれの状態は改善されるだろうと約束したり、そうかと思うと、もしも、われわれが先方の申し入れを黙殺すれば、最悪の災難がふりかかるだろうと脅迫したりする。

ある新聞に掲載された編集コラムの一節

わが社の首脳部は、最近の会合において、わが国の政治・経済の現状に関する検討を行なった。それによれば：
現状は困難の連続である。将来はさらに悪化することは疑いない。
その理由は、今日までのところ、スイス政府が、新しい秩序の下でスイスが栄誉ある地位を占め得るように与えられた、せっかくの多くの機会を、いずれも有効に使うことができないでいるからである。
われわれは、現在の反動政府の政策に影響されることは決してない。
本紙は固い決意をもって、進歩と革新のため前進するのみである。
読者諸君は、必ずやわれわれのこの方針を支持することを確信している。

心理戦に対する抵抗

新聞記事の一節：

国の各層を代表する者数十名の人々が、昨日ある所で集会を開き、集まったすべての者が持つあらゆる知識を総動員して、スイスの現状、および、これに対してスイス政府がとるべき対処策について、討論をたたかわした。

その結果、彼らは全会一致で、目下の種々の問題について注意を促すため、連邦内閣に書簡を送ることに決定した。これらの問題の中には、スイス全国の種々の報道機関に関する問題も含まれている。この書簡に署名した50人の人々は、スイスの報道機関が、スイス国民に迫っている種々の危険に対してあまりに無関心であるとして、報道機関全体を批判している。全体主義諸国の攻勢に対する報道機関の確固たる態度こそ、われわれにとって大切なのであり、連邦内閣はこの問題について充分注意を払う必要がある。

スイス連邦法務警察長官は、直ちに記者会見を行ない、大部分のスイス新聞の示している模範的な態度を賞讃するとともに、わが国民に対して、スイスのあらゆる財産、価値あるものを、引き続き保護するため最大の努力を払う旨を約束した。さらに、長官は、スイスの全報道機関こそ、スイスの独立と自由を守るための戦いの第一線に立つべきであると述べた。

もし外国勢力がスイスを攻撃しようと欲しているのなら、彼らは、スイスの報道機関の態度がかりに友好的であったとしても攻撃をかけてくるだろう。大切なことは、われわれ国民が、外敵のどのような圧力にも、どのようなおどしにも、屈することなく反撃できるように、毎日心がけていることである。

われわれは、自己の運命は自分自身で決定したいと、他人に指図されたくないと、常に願っている。

以上のような法務警察省長官の発言に対して、大きな拍手が起こった。

政府の権威を失墜させようとする策謀

社会進歩党は、その第一次作戦が成功したと判断している。今や第2次攻勢に移った。その目ざすところは、政府と国民との離間をはかることであって、そのためには、刃向う者すべてを中傷し、それに対して疑惑の目を向けさせることが必要である、と考えている。

そこで、連邦政府や州当局の有力者が特に狙いをつけられることになる。これらの要人に対して疑惑の目を向けさせることによって、政府の権威は根底から覆えされていくのであって、国民がこれら当局者を信頼しなくなったときこそ、国民を操縦するのに最も容易なときである。

社会進歩党は、偽わりの怪文書をばらまくとか、その他、国の組織や制度に打撃を与え得るあらゆる手段を用いる。

現存の組織および制度を麻痺させることは、その程度を問わず絶好の方策である。連邦議会は攪乱工作にとってこの上ない目標なので、社会進歩党の議員たちは、ここで、できる限りの手段をとるであろう。

スパイおよび情報機関は、共同して、軍隊の価値に対する疑惑の念を広めようとする。そして、軍部は、やむことのない攻撃の目標となるのである。

政府と国民は一致団結している

このような状況のもとで、連邦内閣は、全スイス国民に対して次のような声明を発した。

事態を冷静かつ客観的に分析してみると、スイスは、国の内外で、実際の戦争に苦しんでいるわけではないが、戦争状態にあると考えざるを得ない。端的に言えば、われわれの直面しているのは、武器をもって戦う戦争ではない。

しかしながら、今日、一種の戦争は厳として行なわれている。それは、武力による戦争に比して直接的破壊が少なく見えるからといって、その恐るべき効果は軽視できない。わが祖国は、ここ数ヵ月の間、強い圧力の下に置かれている。その圧力は、われわれに、それに対して確かに正当な防衛権を行使する権利がある、と信じさせるに充分なほどのものである。

連邦内閣は、スイス全国民に告げる。――われらの自由と独立を守るため、合法的なあらゆる手段を使って戦え！

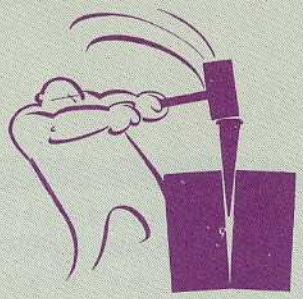
連邦議会は、連邦内閣に対して、あらゆる防衛措置をとることができるよう全権を与えた。

敵の手による偽わりの宣伝にだまされぬように注意せよ。敵側の宣伝は、スイスのラジオ放送と同じ周波数で送られてくることも考えられる。

すべてのスイス人は、一せいに共通の目標のために団結せよ。それは、わが国の制度とわれわれの自由を維持するためである。われわれは、この試練を乗り切って勝利を得よう。

神よ、戦争の種類のうちの、この最も危険なものとの戦いに勝たしめるため、われらにその御手を貸したまわんことを！

政府の権威を失墜させようとする策謀



連邦警察によって押収された秘密報告書の抜萃：

われわれのグループは、いつでも行動に移れる態勢にある。この国の経済省長官に関する調査は、すでに完全なものとなった。計画は次のように運ぶつもりである。

われわれはもっともらしくみえるだろう。

すなわち、連邦内閣のある有力な男はわれわれと共謀していることにされるのだ。その結果、失業者を救済するためにこの男が用意した法案は、われわれがまき起こす騒ぎの中で、必ず否決されることになるだろう。

われわれは、われわれと同調する相当数の新聞記者を利用する。その記者の中には、われわれがつくった文書を信ずる者も出てくるだろう。われわれの組織の中の相当数の者は、最も重要な新聞社から二流新聞の編集局にまで入り込んでいる。

われわれの組織の一員が、わが陣営に引き入れた連邦議会議員の秘書と連絡をとることに成功した。われわれは、彼を事件に引き込み、そして、スパイ行為を行なったとして、彼を非難することにする。

また、スキャンダルの材料も周到に用意した。このスキャンダルを、スイスのあらゆる地方に同時に知れ渡らせるつもりである。

それにもかかわらず、国民と政府は一致団結している

上に掲げた秘密報告書がわれわれの報道機関によって公表された結果、われわれは、いよいよ危険が迫りつつあることを認識した。

事件に巻き込まれた連邦議会議員は、この試練を経て、かえってその権威を高めたのである。彼こそ敵の一味によって狙われた人であるので、すべての愛国者は特に彼を支持しなければならない。

彼が作成した法案は大多数をもって可決され、その結果、わが国経済の立て直しをはかるためのあらゆる措置がとられることになるだろう。

連邦内閣は全権を与えられて、すべての分野で迅速な行動をとることができるようになった。必要があれば総動員も発令できる。

> 新聞、出版物、ラジオおよびテレビは、このような心理戦争の段階においては、まさに決定的な役割を果たすものである。そのため、敵は、編集部門の主要な個所に食い込もうとする。われわれ国民はこれに警戒を怠ってはならない。敵を擁護する新聞、国外から来た者を擁護する新聞は、相手にしてはならない。われわれは、われわれの防衛意欲を害するあらゆる宣伝に対して抗議しよう。

混乱と敗北主義の挑発者どもは逮捕すべきであり、敵側の宣伝のために身を売った新聞は発行を差し止めるべきである。侵略者のために有利になることを行なった者は、その程度のいかんを問わず、裏切者として、裁判にかけなければならない。

その工作とそれに伴う事態の推移：

1月15日　幾つかの新聞は、経済省長官の国家に対する忠誠心を問題として取りあげる。

1月18日　今や政府の実権を握る経済省長官に反対する痛烈なキャンペーンが始まる。

1月20日　経済省長官は辞任を拒否する。幾つかの新聞は、彼を攻撃する文書に疑いを抱く記事を発表する。

1月25日　X長官への攻撃が続く。彼の国家に対する忠誠心が問題化される。

3月15日　X氏事件は再び大きくなる。彼の秘書がスパイ容疑で非難される。

4月29日　社会進歩党の執行部はゼネストについて語る。

4月30日　X氏ついに辞任。

国民は、もはや、だれの言うことが正しくて、だれの言うことが間違っているのか、わからなくなる。すべての裁判官は現在疑いの目で見られている。何が起こるのかわからない。

1月15日　連邦内閣は、全権を与えられているおかげで、失業および買占めに対する有効な対策を実施し、スイスの安全を確保するため努力する。

2月2日　社会進歩党の執行部は、この全権の行使に反対するデモを組織したが、失敗に終わった。国民は、このような悪徳スイス人によるデモを無視する。

3月20日　好ましからざる外国人は国外退去のため国境へつれていかれる。

6月21日　スイスの各大学都市の学生が、国の独立を守るためのデモを行なった。

7月4日　社会進歩党の議員による議会での議事妨害は、うまくいかない。

9月14日　X長官に対して企てられた陰謀の主犯が逮捕され、多くの文書が押収された。

9月19日　愛国者の諸団体が公式に会合。

国民の信頼は不動。スイスは健在であり、いかなる犠牲でも払う用意がある。

内部分裂への道

スイスと同様に全体主義諸国によって脅迫されているわれわれの隣国では、ついにクーデターが起こり、侵略者に協力する政党が政権を握った。

外国勢力は、時を移さず、彼らの立場からの「秩序維持」のために行動を開始した。その結果、この外国勢力がスイスの国境に迫ったのである。

国境には、スイス軍の弱小な部隊しか駐留していなかったので、偶発的な衝突が幾つか起こって国境は突破されそうになり、政府は、脅迫に屈して陳謝するのみだった。

政府は外国勢力の圧力に屈し、国家安全保障のための態勢の解体さえ命じた。

社会進歩党は、この措置を歓迎するとともに、隣国の占領国と軍事同盟条約を結ぶように圧力を加える。

スイスは分裂した。

みずからを守る決意をもっていれば

われわれの隣国に起きた事件やこれまでに述べてきたもろもろのことは、注意深いスイス国民にとっては幸いな結果をもたらすであろう。

つまり、危険が目前に迫ったことによって、これまでどっちつかずの態度でいた者は、はっきりした態度をとらざるを得ないことになり、また、スイス国民の精神的連帯感は刻一刻と強まっていくのである。

今隣国に起こっている悲劇、すなわち、その国を支配し、その国の自由と独立の伝統をすべて破壊しつくす外国の侵略軍を、みずから招き入れた国の悲劇を目の前にして、これまで最も盲目的であったものも今や事態にめざめるのである。全スイス国民は、若干の裏切者を除いて固い団結を誇っており、共通の理想のためには死をかけて戦う用意がある。

ただちに発動される総動員令は、あらゆる代償を払っても抵抗するという固い決意を示すものとなるであろう。

全体主義諸国の元首からの脅迫状は、そのまま突き返されるであろうし、煽動者どもは、直ちにその破壊活動を阻止され、裁判所に送られるであろう。われわれ国民の固い決意はここにおいても、また、わが国を救う。

滅亡への道……

次のようなことが起こり得る。

衰えたスイスでは工場、弾薬庫、高圧線に対して至る所で破壊が行なわれる。前線は極度に緊張している……

汽車が脱線する

殺人が
行なわれる。

殺人犯も裁判にかけられない。スパイ行為がしきりに行なわれ、すべての国民が互いに疑惑を抱く。

敵は堂々とその組織をスイスに送り込む

警察はもはや市民を
頼りにできない

**市民はテロリストの仕返しを恐れ
彼らの側に立つ。**

わが国の経済事情はますます悪化し国外からの政治的圧力が高まる。

わが国に出没するテロリストたちは、このために特に任命された指揮官の下で行動している。彼らは社会のあらゆる層に浸透し、驚くべき大胆さで暗躍する。彼らの“平和のための戦い”は、全国に、混乱、恐慌、無秩序をまき散らす。

このような危険な環境のもとで、われわれ国民の抵抗精神は衰えていく。

法と秩序が保たれれば

（政府が適切な手を打てば――）

総動員令が手際よく発動された。煽動工作員どもが軍隊内で逮捕され、直ちに軍事裁判にかけられた。連邦および州の警察は、精力的かつ敏速に行動し、われわれを取り巻いていたスパイ網は、すでに解体された。スパイは軍刑法に基づいて裁判される。

社会進歩党の党首およびそのおもな協力者が逮捕された。驚くべき破壊工作用の物資が押収された。その中には、多数の通信機械、武器、爆弾類、制服などが含まれている。

テロ活動の全貌は、すでに検察庁の手中に知られている。法は、スパイと裏切者の取締りのために適用され、国民は、犯罪人に対する裁判を信頼の念をもって見守る。嫌疑をかけられた多数の外国人が国外に追放された。

スイスが分裂していたら

社会進歩党の機関紙の記事：

事態は急速に発展している。わが党は、スイスを取り巻く諸国と平和を実現するとの公約に忠実に精力的な活動を続けている。スイスの二つの州における最近の選挙で、わが党の同志は過半数を獲得した。それは、最終的勝利への第一歩である。

他方、進歩的な外国とわが国との間でいずれは調印すべき条約の締結を早めるため、わが党の同志は、外国に亡命政府を打ち立てて、条約締結の交渉にあたることになった。ベルンのかいらい政権が、このような企ては違法だといったところで、無駄である。この計画が実現しつつある現実を見よと言いたい。

現在のエセ政権は現在われわれが置かれているこの無秩序を解決できないということが、最終的に判明したときこそ、われわれの同志が国外からスイス領土に呼び込まれ、スイス周辺諸国でとったのと同様の行動を展開してくれるだろう。

スイス国民の幸福のみを願う諸国のスイス国民に対する完全な保護を、今ただちにわれわれの同志がもたらすことができなくても、それは、われわれの同志の誤まりによるものではない。

スイス国民の消極的な態度には、いらだたしいと言わざるをえない。彼らは、われわれに味方しないで、単にみずからを運命の手にゆだねているかのごとくである。

スイスが団結していたら

全体主義諸国による大規模な“平和攻勢”において、彼らは、スイス国民の幸福を願い、また、人類の、より一層の幸福と安全のために、われわれと協力しようと言っている。すべてが結構ずくめである。われわれは、世界のすべての国と平和に生きること以上に、何を希望することもない。しかしながら、われわれの知っているこれまでの経験は、われわれ自身の運命を他人に再びまかせてはならぬ、ということを教えてくれる。

われわれに対して、外国から次のような呼びかけがある。

まず、スイスの兵士をそれぞれの家庭に帰そうではないか。国境に集結していても無駄ではないか。家庭に、なすべきことが待っている、と。

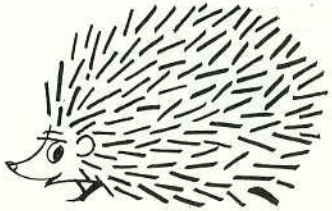
これに対して、われわれは次のように答える。

それはわれわれ自身の問題で、他国の知ったことではない、と。

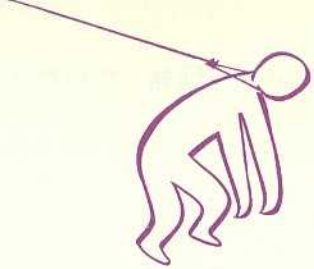
また、われわれは、“平和の戦士”を裏切者と考えぬように、という圧力を受ける。これに対して、われわれは、“平和の戦士”なるものが、わが国の法と制度を尊重する証拠を見せてくれるのを待つこととする。われわれは、スイスの絶対中立主義に反する同盟は、いかなるものも外国との間で締結するつもりはない。

われわれは、また、自分自身の都合次第で、つまり、自分に都合がいいか不都合であるかに基づいて外国に干渉するつもりは、全くない。われわれのコップは小さいが、それで結構だ。われわれは自分のコップを使って水を飲む。大国と大国との間の紛争は、大国が自分たちで解決して欲しい。われわれ自身の問題の解決には、大国は口を出さずに、われわれ自身による解決にまかせて欲しい。

われわれは、外国による後見人は、どのようなものも受け入れない。われわれは、スイス国内に“外国人の裁判官”を持ちたくない。



首に縄をつけられるか



われわれに対する威嚇：

われわれをおどかしている外国軍の司令官が、スイス連邦大統領を、その本部に招いたが、そこへ行くべきではなかった。スイスの政治家や行政官は、すでに社会進歩党の圧力に屈している。外国軍の司令官は言った：

> われわれがこれから千年にわたって築き上げようとしている新ヨーロッパ秩序に、スイスも参加していただきたい。この点を御理解いただけないのなら、あなたの国は亡びますぞ。
>
> スイスは今や、内戦、飢饉、および、それから生ずるあらゆる混乱の瀬戸際に立たされているのです。
>
> どうか、私に、あなたの国を援助させて下さい。

沈黙が続いた後、さらに彼は言った。

> スイス軍の動員を解きなさい。スイス国民の中には、われわれに保護を求めてきた者もたくさんいる。彼らは、スイスの当面しているいろいろの問題を解決するため、あなた方を助けることができる。だから、あなた方も彼らと協力しなさい。
>
> もし、あなたが、これらの条件を受け入れないとすれば、スイスはどのような混乱に見舞われることか。それを私は心配する。よって、このような場合は、すべての者に受け入れられる状態をつくり出すため、私は軍隊を率いてあなたの国に入らざるを得ない。

スイス連邦大統領は、連邦内閣にこのことを報告した。連邦内閣は、スイス国境に集結している外国軍の司令官と引き続き討議を行なうことを了承した。

全体主義国の報道機関は、スイスの政治家や行政官が示した"理解"ある態度を歓迎した。そして、これから実施される解決策、つまり、経済的破壊と流血のない解決策の重要性を強調している。

われわれは他国に追随しない

1874年連邦憲法第二条は、
次のように規定している。

《この連邦は、外国に対する独立を確保し、国内の安寧と秩序を維持し、連邦諸邦の自由と権利を擁護し、かつ、その共通の繁栄を増進することを目的とする。》

われわれは、例外的な解決策をつくり出してはならない。憲法がわれわれのとるべき態度を規定しているのである。この連邦の目的は、この伝統をわれわれに残した先人によって、明確に定義づけられている。

われわれは、外国からの働きかけに耳をかしてはならない。われわれの義務は明確である。すなわち、国内の秩序を維持し、外国に対して独立を守ることである。

この二つの努力目標が、われわれの国家防衛の存在を正当化するのである。

われわれは、他国に追随しない。

卑怯な行為と辞職が続く中で、スイスは、ついに最終的な屈服への道を歩む。全体主義国の指導者は、ついにスイスに対して最後通牒を突きつけた。その要求はあまりにも厳しい。立ち直るには今や遅すぎる。

連邦大統領は辞任した。

軍隊の動員は解除され、スイスは今や敵のなすがままとなった。

世論は全くバラバラに分裂し、右翼も左翼も、互いに“裏切り”のことばを投げ合っている。

連邦議会は、新しい連邦内閣の首相に社会進歩党の党首を選んだ。彼は国防省の指揮権を要求した。

ある朝、全国向けラジオ放送で、“あまりにも古くさいスイスの諸制度”は終了した旨が告げられ、新たに選ばれた連邦内閣の首相は、みずからを“新生スイスの盟主”と呼んだ。

これに反抗した多くの政治家や行政官は刑務所に入れられ、国会議事堂前の広場では、数時間後に、褐色のシャツを着た“平和部隊”三個大隊が行進した。

新しい“盟主”は、国家の全権を握っている。

彼は、昨日、スイスの“秩序回復”のため外国軍隊の介入を求め、ここに、わが国の名誉と誇りの長い歴史は、その幕を閉じたのである。

スイスにはまだ自由がある

政府の安定性は、わが国の政治における基本的な要素の一つである。国民が団結しており、強力であるときに、政府は、初めて、公共の福祉のための政策を有効に推し進めることができるということは、国民自身がよく知っている。だから、わが国の将来を背負っている中心人物に疑惑の目を向けさせることを狙っている人々の策略などによっては、政府に対するわが国民の信頼の念はゆるがない。特に危険が差し迫ったときは、敵に対して共同戦線を張ることが必要である。

スイス国民は、同時にスイスの兵士であり、国民はそれぞれの義務を遂行できるよう各自が武器を持っているが、国民の義務とは、武器を用いることが第一なのではなく、まず、その精神が問題である。外敵から国を守るため、および国内の秩序を保つための、岩のように固い意志を持つ必要があり、その意志が強固であるときにのみ、われわれは持ちこたえることができるのである。

政府に対する尊敬の念は、スイス国民の精神的態度の中に現われている。国民の支持は、連邦および州を初めとするすべての当局者に向けられなければならない。上下を問わず、すべての国民が、ひとしく確固たる決意を持つべきである。

われわれは、いつまでもスイス人でありたいし、また自由でありたい。スイスの独立は、われわれ国民の一人一人にかかっている。

これまでに、われわれは、この上ない悲劇的な場面のことを考えてきた。それは、スイスが占領され、かつ、スイスがその国民自身によって裏切られる場合のことである。

このような場合を避けなければならないが、そのためには、最悪の場合を想定しておく必要があるのだ。

われわれは、その伝統を顧みないスイス、少しづつ分裂と衰亡に落ち込んでいくスイス、そして、ついには惨めな裏切りと占領に終わるスイスを想定し、それぞれの場面を描いてきた。

しかし、このように外国勢力の言うがままになる政策をとったとしても、スイスが戦争から逃がれることは不可能かもしれない。このような場合は、スイスは新たな外国勢力の活動舞台になるおそれがあり、国民は、何の保護も受けることなく外国勢力の攻撃にさらされることになるだろう。すべてから見放されたスイスは、もはや外部の援助を期待することができなくなるだろう。

これに反して、もしスイスが一致団結していたら、事情は逆になるに違いない。すなわち、スイスには、このような、戦争の第二の形、つまり目に見えない戦争に対して抵抗し得る機会が、充分に残されているだろうし、スイスみずからが自己の運命を決定できる機会も残されているだろう。たとえ、敵が長い期間わが領土を占領したとしても、国を愛する者は決して失望せずに、独立の回復のため日々、努力すべきである。

そうすれば、いつかは、きっと新しいスイスは占領軍に対抗できるようになり、新しくやってきた外国軍隊は、さんざんな目にあって撤退するだろう。そして、スイスはその自由と独立を取り戻すことができる。

レジスタンス(抵抗運動)

国際法
占領された国の国民の保護と権利
抵抗運動における戦いの戦略と戦術
消極的抵抗
違法な占領政策に対してとるべき行動
積極的抵抗
裏切者に対する戦い
スパイ
敵を消耗させよ
怠業、破壊行為
占領軍に対する公然たる闘い
解　放

すべての国の国民は、その願望、伝統および信条に従って自決の権利を有する。諸国は国際連合憲章の中でこの権利を正式に認めた。したがって、すべての国民は、外国の暴力行為に対しては、抵抗する権利を有する。どの国民も、もし、自由への固い決意に燃え、正当な手段を用いて侵略者に抵抗するならば、いつまでも抑圧され続けることはありえない。

国土を占領した抑圧者に抵抗することは、厳しい努力を要する。地下抵抗闘争においては、罪のない人々が無駄に苦しまず、また、無益な血を流さぬように戦わなければならない。

占領地帯では、住民は、国際法に基づいて最低限の保護だけは与えられる。

一方、抵抗運動は、戦時法規の規定に基づく恩恵に浴するために、その諸規定を遵守しなければならない。単なる殺人は禁止されている。

占領軍は、あらゆる方策を尽くして、占領地における抵抗運動を抑圧しようとする。占領者は、関係者の国外追放、恐怖政治、食糧供給の停止、集団的処刑、罪もない人々の虐殺などの手段を用いて、戦時法規を破るだろう。ベルコール、オラドールおよびワルシャワのユダヤ人街に起こったことを忘れてはならない。

占領軍は強力な武器を持っている。だから、占領軍が仕返しとして武力を用いるような口実は、どのようなものでも与えないようにしなければならない。

散発的な行為や、効果的でない行為は、かえって有害である。

抵抗運動は、責任者によって組織され、指揮されるものでなくてはならない。指揮者は、行動に移る時間、手段、場所などを決定する。

抵抗運動のための戦闘は、このような抵抗運動の組織に所属している者だけが行なうべきであって、このような者は、一般国民とハッキリ区別がつくようなマークをつけ、かつ、武器を堂々と持つべきで、隠して持ってはならない。

原則として、抵抗運動としての戦闘は、軍隊に属する指揮官と兵士とによって行なわれることが望ましい。彼らは、よく準備しているので、効果的に行動しうる。彼らの身につけた規律は、孤立した、効率の悪い行動を、未然に防ぐことができる。よく統率され、効率的な訓練を受けていれば、比較的少数のグループでも、敵の大軍に打撃を与えることができる。

その他の一般国民は、戦闘行為を差し控えねばならない。抵抗運動組織を援助するにとどめるべきであるが、それには次のような方法がある。

1. 戦闘参加に不適格な大部分の一般国民は、占領軍に対して厳然たる態度を示し、できるだけ接触しないようにすること。

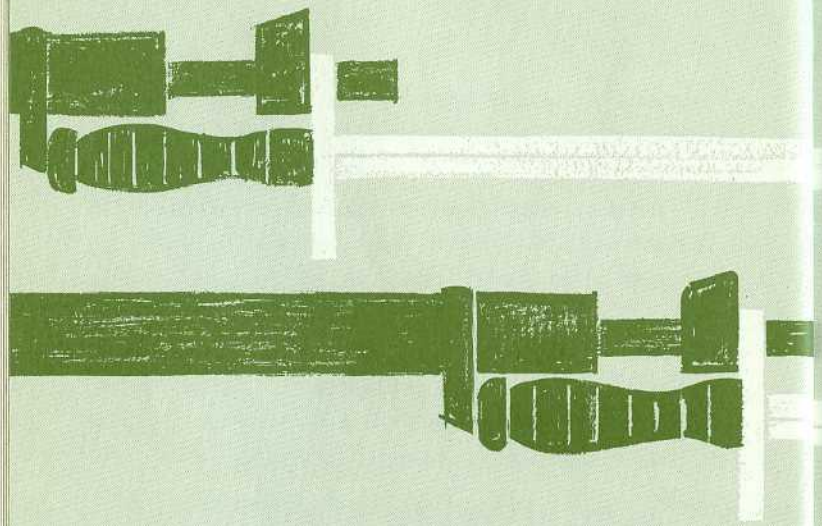
2. 戦闘に参加できる者は、すべて抵抗運動組織に所属しなければならない。

3. 上記2の厳密な意味での「抵抗運動」を補助するもの、つまり、秘密組織のメンバーは、情報を一般国民に伝達し、情報の仲介役として働き、また特別の命令を帯びた者をかくまったりする。これらの活動は、その行為をする者みずからの責任において行なわれるが、これらの活動をする者は、その家族とともに、敵の仕返しを受ける危険にさらされていることを知らねばならない。

抵抗運動に参加しているすべての者は、生命を失う危険がある。それは遊戯ではなく情け容しゃのない戦争だからである。

スイスのすべての男子も女子も、もし、敵が不法な手段で、その身体、生命または名誉をおびやかすような場合には、あらゆる方法で正当防衛を行なう権利を有する。

この権利は誰れも否定できない。



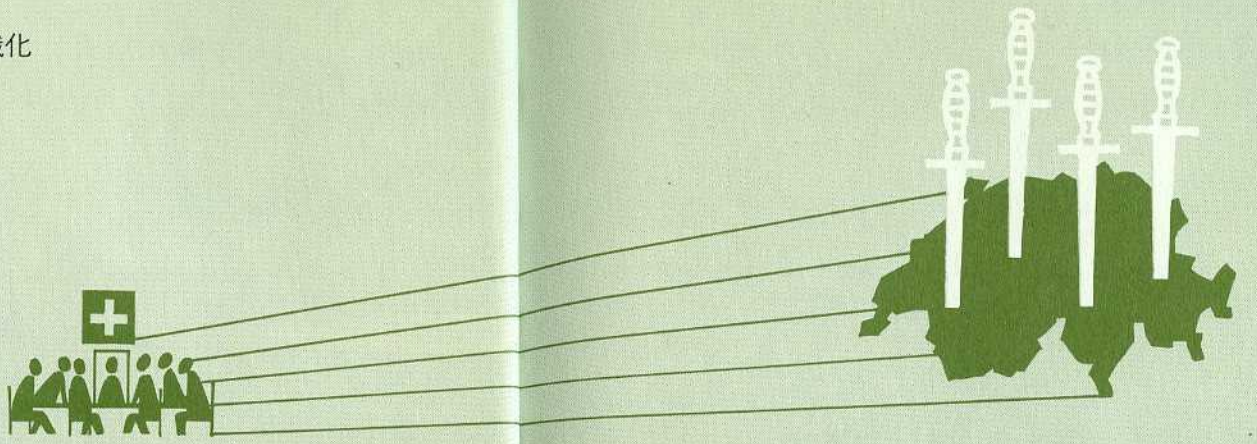
戦闘はだんだん縮小されていく。一般国民は、おそるおそる避難所から出てみる。民間防災組織は、まだ使うことのできるあらゆる手段によって一般国民と連絡をとり、どのように行動すべきかを伝達する。

町全体が瓦礫の山と化してしまっている。橋は破壊され、道路は残がいで埋まり、家屋は炎上している。外に出て最初に気づいたことは、そこかしこをパトロールしている兵士たちが、われわれスイス兵ではないことである。われわれの町は占領されたのだ。町の四つ角では、装甲車がわれわれを睨んでいる。それは敵の装甲車なのだ。

占領軍は、まだ住むことのできそうな家屋、洞穴、避難所などの捜索を始めた。スイスの兵士たちが連れ去られて捕虜となる。スピーカーが住民に対して、解放軍を歓迎せよと呼びかける。さらに征服者のスピーカーは続けて言う。

「少しでも抵抗したら容赦しない」と。

占領下の生活が始まった。
道路上の残がいは少しづつ取り除かれ、主要な道路では再び通行ができるようになった。
民間防災組織は、前代未聞の社会混乱の中で、少しでも秩序を取り戻そうと努力している。
占領軍は、川にかけた仮橋の二つを破壊した。
兵士と物資を積んだトラックが絶え間なくスイスの中心部に向けて走っていく。
占領軍の衛生隊は、ほぼ無傷で残った病院を占領した。ジュネーブ条約の規定に従って、病院で働く人々は、スイス人であると侵略者であるとを問わず、区別なく傷病者を手当している。
病院のホンの一部分が一般国民用として使われている。
こうして、生活は再び始まった。
しかし、占領軍は、軍事以外の行政および司法組織には、まだ手をつけていない。われわれ自身のこれらの組織は、依然として動き続けている。
郊外にある学校の中で、比較的爆撃による損害の少なかった所が再開された。
幾つかの商店も店を開いた。
食料の配給割当はどうやら満足のいける程度になった。
バラックを取りあえず急造しなければならぬ。
洞穴に住む者もいる。
誰れも敵と接触しない。



わが領土のほとんど全部が敵によって占領されている。何人かの重要人物は、強力な抵抗運動をすみやかに組織するため、国外に逃がれることに成功した。

《国民執行政府》を構成する者の中には、最も高い地位にある政治家たち、高級官僚、各国民政党の指導者、各労働組合の代表者、各愛国団体の代表者が見受けられるが、これらの人々は、緊急避難の法理に基づき亡命政府を樹立する。

“スイス解放放送”の第一声

スイス国民に告げる。スイス軍の主力は、すでに戦闘を一たん停止した。われわれの軍隊は力の限り戦ったが、あまりにも多勢に無勢のため、形勢が不利になったのだ。しかし、われわれはまだ降伏はしていない。戦いは続いている。しかし、今度は別の方法による戦いである。スイス政府は、祖国での活動が困難になったため、本日から、われわれに便宜を与えてくれた友好国からこの戦いを続ける。この放送は、正統スイス政府の名において、国民に対して行なっているのである。

われわれ正統政府は、祖国の完全解放の実現のため最後まで戦う。

当面は臥薪嘗胆せよ。敵の反撃を招くような行為は絶対につつしめ。時が来れば、スイス解放放送が国民に指示する。失望は無用である。われわれの決意は固い。時がたてば必ずや形勢はわれわれに有利になり、いつか必ず解放の光が輝くであろう。

当分の間は無謀な行為をつつしみ、国際法を遵守せよ。

この放送は、スイス国民に抵抗運動のやり方を指示する。この戦いにおいて国民すべてが確固たる決意を示していることは、最後まで戦い抜く勇気をわれわれに与える。希望の灯は、絶えずわれわれの生活に、ともされている。無駄な犠牲は決して払わずに、じっと待て。

以上が、昨日聴取した《スイス解放放送》よりのメッセージである。

亡命政府の大統領と解放軍の総司令官の仕事は容易なものではないが、幸いなことに、彼らは至る所で多くの協力を得ることができる。スイス国家の将来への希望は、ひとえに、この二人のまわりに集まっている。数千の退役兵士たちは、地下運動のためにいつでも銃をとる用意がある。彼らは新しい配置につけられることを心持ちにしている。

地下組織が次々につくられる。スイス全土が碁盤の目のような区域に細かく分けられて、それぞれの区域は、地下組織の地方活動区域となり、経験を積んだ指揮官と正統政府によって任命された行政司法組織の下に置かれる。パラシュート降下作戦が検討されている。これは、われわれの友好国の好意によってわれわれが使用することのできる設備のおかげである。われわれの訓練は国境外で続行されており、そして、抵抗運動が着々と明確な形で組織されている。

黙って好機を待て

今朝、スイスのほぼ全土にわたって、何百万というビラが発見された。国民は夢中でそれを拾って読んだ。

スイス国民に告ぐ！　勇気を失うな。絶望にとらわれてはならない。われわれにとってまだ時機が早い。早まって好機をつぶしてはならない。これから何週間、いや、何ヵ月、何年先になっても、じっと、こぶしを握りしめ、怒りを心の中で嚙みしめなければならない。

国際情勢はわれわれに有利に展開するだろう。しかし、一日にして好転するものではない。

働け！　忍耐せよ！　われわれができることは何でもやろう。しかし、一人として国民の中から無駄に死ぬ者を出してはならない。時が来ればわかる。われわれは、解放のための共通の希望、共通の決意によって、奮い起ち、一せいに蜂起しよう。散発的な、無益な行為によって、われわれの好機をつぶさないようにしよう。敵も、また、敵に協力するスイス人も、決して殺してはならない。工場に対しても、通信施設に対しても、また兵站所に対しても、破壊活動を行なってはならない。一般国民がこのような行為を行なうことは、国際法で禁止されている。

われわれが効果的に行動できるときが来たら、時を移さず立ち上がろう。政府は国民すべてとともにある。同じ心と、同じ決意をもって。当分の間は、威厳と規律をもってこの試練に耐えよ。

隠れ家で聞いた“スイス解放放送”：

スイス国民に告ぐ！　国民が忍耐できるギリギリの所に来ていて、じっとしてはいられない、ということは、よく理解できる。われわれもそうなのだ。しかし、時機を待て。傷ついていない国民の力を大切に保て。解放の鐘が高らかに鳴り渡った日に、この力は幾らあっても足りなくなる。

抑圧者の存在は、知らぬふりをせよ。敵の前では、つんぼ、めくら、無感動になれ。敵は国民を馬鹿にするだろう。そのときは敵を見るな。敵は国民をなぐるかもしれない。そのときは痛みをこらえよ。敵は国民に話しかけるだろう。そのときは敵のことばが呑み込めないふりをせよ。

当面反乱を起こしても何にもならない。敵は強大である。小羊は狼の前で何をしても無駄だ。破壊活動や暗殺行為をしたり、部分的に恨みを晴らす行為をしたところで、当分の間は大した効果はない。われわれがここだと思う時機に、われわれすべてが一致して攻撃に移ろう。

被占領国は占領軍の思い通りにされるわけではない

国際法には、次のとおり定められている。

占領軍は、好き勝手に行動する権利を持っているわけではない。占領軍であっても、陸戦に関するヘーグ条約およびジュネーブの赤十字協定を尊重する義務がある。

占領された国の国民は、これらの条約と協定によって、その生命、名誉、宗教、習慣、財産を保護されることになっている。

占領軍は、占領国民の生活手段や病人に対する手当を保障せねばならない。教会や学校に害を及ぼしてはならない。また、行政活動が自由に行なえるようにすべきである。

他方で、占領軍は、被占領国の武器、運送手段、通信機械（ラジオなど）を、戦時国際法に基づいて没収する権利がある。また、税金を徴収することもできる。

もし占領軍が国際法規に違反した場合には、住民は、自分たちに加えられたすべての危害について、公式に、占領軍当局または赤十字に訴え出ることができる。どのような場合でも、合法的な範囲内で抵抗しなければならぬ。抵抗すれば、敵をいら立たせ、われわれの立場を悪くする。

しかし、黙っていると敵のやったことに同意したものと思われるかもしれないから、占領国軍隊の犯した過失は、すべて記録しておこう。いずれ解放の日が来たとき、裁判所で公正に話をつけるために。

占領軍は、次のようなことを行なう権利を持たない。

1）理由なしに国民を逮捕すること。裁判にかけずに国民に刑を言い渡すこと。国民を強制移住すること。

2）報復のため無実の人に危害を加えること。

3）犯人がハッキリしないことについて、集団を罰すること。

4）人質をとること。

5）住民を、軍の工事に使用すること。戦闘作戦中の盾とすること。占領軍の軍務に服させること。

6）住民に戦闘行為を強制すること。

7）良心に反する誓いをさせること。

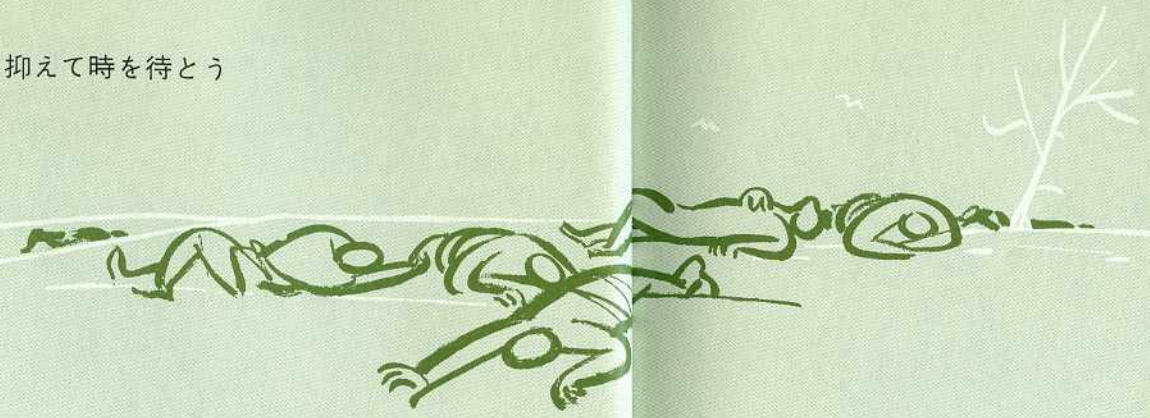
8）暴力を用いて、秘密を暴露させること。軍事的情報を無理に白状させること。

9）病院をその本来の用途に使えないようにすること。病院の医師や職員の任務遂行を妨げること。

10）何であろうとも略奪すること。私有財産を没収すること。

11）どのような形であっても個人に対して暴力を加えること。

怒りを抑えて時を待とう



ある村にいる占領軍の兵士たちが、彼らの隊内で何かを祝って騒いでいた。彼らは、宿屋の主人から酒倉の鍵を無理に手に入れて、へべれけになるまで飲んだ。酔っぱらって、何かわからぬ熱情にかり立てられた彼らは、勝利の叫び声をあげながら教会に向った。そして、教会を荒らし、礼拝に用いる品々を破壊し、聖なる櫃に対しても不敬を働き、安置してある像を地上に投げ出した。

彼らが教会から出たとき、一発の銃声が響いて、仲間の一人が倒れた。彼らはさらに怒り狂って、村の当局者に対し武器を持ってる男をみんな建物の入口に集めるように命じた。村の責任者が彼らに代って名乗り出たところ、兵士たちは彼を射殺し、さらに、みずから犯人を追及しはじめた。やがて20名ばかりの村人が教会に閉じ込められた。

軽機関銃の一せい射撃が聞え、こうして村の人々は、約20名の無実の人人の身に振りかかった運命を知らされたのである。さらに、村には火が放たれ、女子供は逃げまどった。

これら犠牲者の血は無益に流されてしまったことになる。このように、一人の愛国者の怒りの行動は、われわれの不幸を増すだけに終わってしまうだろう。

多くの人々が殺されたこの村の悲劇は、だれの役にも立たない。われわれが効果的な武力抵抗作戦を始める日が来たら、この人たちはわれわれにとって非常に必要だったのに。

われわれの力を浪費しないようにしよう。われわれの勇気を無駄に使わないようにしよう。待ちに待つことが大切だということを、だれもが理解せねばならない。無分別な怒りの行動を理性によって抑制しよう。

理性の前に感情を殺せ！
怒りを抑えよ！
行動を起こすには、まだ早すぎる

占領軍の洗脳工作

今や占領軍はわが国の全土を手に入れた。
彼らは絶対にわが国から出ていかないかのように行動している。
あるときは残忍なまでに厳しく住民を痛めつけ、あるときは反抗する住民を手なずけようとして、約束や誓いを乱発する。
言うまでもなく、彼らに協力する者が、どこでもわが国の行政の主要ポストを占めていて、すべてのわれわれの制度を改革してしまおうと占領軍に協力している。
裏切者にまかせられた宣伝省は、あらゆる手段を用いて、われわれに対し、われわれが間違っていたことを呑み込ませようと試みる。
彼らは、レジスタンスが犯罪行為であり、これはわが国が強くなるのを遅らせるだけのものだということを証明しようとする。
占領国の国語の学習がすべての学校で強制される。

歴史の教科書の改作の作業も進められる。
“新体制”のとる最初の処置は、青少年を確保することであり、彼らに新しい教義を吹き込むことである。
教科書は、勝利を得たイデオロギーに適応するようにつくられる。
多くの国家機関は、あらゆる方法で青少年が新体制に参加するようそそのかすことに努める。
彼らを、家庭や、教会や、民族的伝統から、できるだけ早く引き離す必要があるのだ。彼ら青少年を新体制にとって役に立つようにするために、また、彼らが新しい時代に熱狂するようにするために、彼らを洗脳する必要があるのだ。
そのため、新聞やラジオ、テレビなどが、直ちに宣伝の道具として用いられる。個人的な抵抗の気持は、新国家の画一的に統一された力にぶつかって、くじかれてしまう。占領軍に協調しない本や新聞には用紙が配給されない。
これに反して、底意のある出版物が大量に波のように国内にあふれ、敵のイデオロギーは、ラジオを通じて、また、テレビの画面から、一日中流れ出ていく。それは、あるいは公園の樹木に仕かけられたスピーカーから、あるいは町を歩く人に映像の形で訴えられ吹き込まれる。
だれでも公式発表以外の情報は聞けないように、聞いてはならないようになる。
教会は閉鎖されないが、そこに通う人たちは監視される。こういう人たちは容疑者扱いなのだ。学校では、あらゆる宗教教育が禁止され、精神的な価値を示唆することは一切御法度になる。

占領軍の法廷で劇的な裁判が行なわれている。二人の青年作家と一人の新聞記者が、国家の安全と利益に対し害を与えた疑いで起訴された。彼らの書いたものが、占領国と被占領国との間の友好関係を害する性質のものであるというのだ。

これに関連して興味深く注目されるのは、次の事実である。

これらのインテリは、占領前においては最も進歩的なグループに属し、“新体制”への統合をもっぱら主張していたのである。したがって、彼らは、占領軍によって特に優遇されたが、日ならずして彼らは、自分たちに残されている自由なるものは、目を閉じて全体主義イデオロギーに奉仕することだけである、ということを知った。

彼らは、勇敢にも自分たちが間違っていたことを認め、公けの場で、彼らがその犠牲にさせられた偽わりの体制を非難したのである。

あとには厳しい判決が待っているのみだ。しかし、この裁判を熱心に見守るわが国民に対して、彼らの正直な、勇気ある行動は、大きな印象を与えるに違いない。

われわれ一人一人にとって、武器を手にして戦うことが問題になっているのではない。その時機はまだ来ていない。今なすべきことは、あくまでも祖国に対する忠誠を守り続け、われわれ一人一人が道徳的な抵抗の模範を示すことである。占領軍は、自由と独立を求める意志が張りつめている国民を屈服させることは、決してできないであろう。

占領軍は、そういう国民を傷つけることはできるが、屈服させることは不可能である。もしも、小学校から大学に至るまでの先生たちが、われわれの自由の理想と国民的な名誉に対して、あくまでも忠実であるならば、占領軍は、絶対にその思想に手をつけられず、従ってその思想を屈服させることはできないであろう。精神的な抵抗運動をだれよりもまず最初に引き受けて実行するのは、わが国の教育者たちである。

わがスイスの兵士が再び武器をとって祖国の解放のために立ち上がるとき、その行動は全国的な動きに支持されなければならず、また、その行動は、弾力的な抵抗運動によって士気が衰え、疲れはてた敵に向けられねばならない。

解放戦闘の開始

数年の歳月が過ぎてからかもしれないが、ついに秘密の攻撃命令が発せられた。しかし、それでも、すぐに戦闘が行なわれたり輝かしい成果があげられるわけではない。初めのうちは、まず、すべてのことが極秘のうちに進められる。

その行動開始にあたっては、おそらく占領国がまず外国の戦場で敗れるのを待たねばならないであろう。そうすると、占領国はその兵員が不足し始めるから、わが領土を占領している軍隊の戦力がそれだけ低下する。その弱まった敵の組織の間に、この秘密の戦いのために外国で準備を整えることのできたわれわれの軍隊が浸透して、さらにその弱点を拡大するのだ。わが軍の行動は、彼らが受けた訓練によって特に効果的なものとなっているだろう。

厳しく監視されている組織の中にわれわれの工作員が浸透していくためには、時間と忍耐が必要である。まず、彼らは、忠実な「協力者」として、敵側に認められる必要がある。その上で、彼らは、官公庁（鉄道、郵便、ラジオ、テレビなど）の主要なポストに配置され、その日が来れば、彼らは、わが領土の解放に重要な役割を果たすことになる。

国民は、したがって、このような危険をおかしているわれわれの仲間に対して、慎重に行動せねばならない。公けの席では彼らを非難しても、彼らの行動を麻痺させることがないよう、充分に気をつけるべきである。こういう一人二役は、抵抗運動における最も重要な秘密武器の一つである。

容赦のない戦い

解放闘争は、まず最初の局面に入った。われわれの闘士はまだ数千名しかいない。しかし、彼らはあらゆる場所におり、しかも、ちょっと見たのではどこにも見当らない。

彼らは、占領軍の物資を破壊し、損害を与え、思いもよらないような状況下において、すばやく、かつ、絶え間なく行動し、直ちに身を隠し、他の場所に現われる。情容赦なく敵に打撃を与え、敵の士気を喪失させる。したがって、敵は、どこにいても安心していられない。敵の連絡はサボタージュされ、そのために、組織的に大規模な制圧行動をすることが困難になる。

解放された区域においては、武器の貯蔵が可能となり、また、訓練の施設を組織化することができるようになるから、抵抗運動の戦士たちは、その区域から、武器を手にして、毎晩、彼らの出現が予想もされない場所に出かけていく。住民は、至る所で、ひそかな、静かな協力者となる。

抵抗運動の直接的な行動に参加しない住民は、完全な沈黙を守るべきである。戦争法規によれば、住民は、占領軍に対してどのような情報をも提供する義務を持っていないのだから。

解放戦争の最初から、敵を、どこにいても不安な気持にさせる必要がある。彼らが利用できるものはすべて破壊せねばならぬ。

この段階になったら、もはや占領軍の弾圧を避けることはできない。しかし、武装抵抗の専門家たちは、どこを攻撃すれば最も効果的であるかを知っている。

住民は、暴力的な懲罰を免れることはできないだろう。そして、銃殺や強制収容所送りが続発するだろう。多くの地域が破壊され、牢獄は“容疑者”で一ぱいになるに違いない。

しかし、これらの犠牲は、解放が近づきつつある闘争のこの段階においては、もはや無駄ではない。この段階で倒れる者は、神聖な大義のために彼らの生命を捧げることになるのだ。

解放軍は足場を固める

猫に対する鼠のようなこの戦いが、どんなに困難なものであっても、抵抗運動は絶え間なく進展する。抵抗軍の配置は日一日と充実し、その人員は増大する。個人から個人へ秘密のうちに伝えられる命令によって、旧常備軍の幹部と兵士たちは戦闘準備態勢に入った。

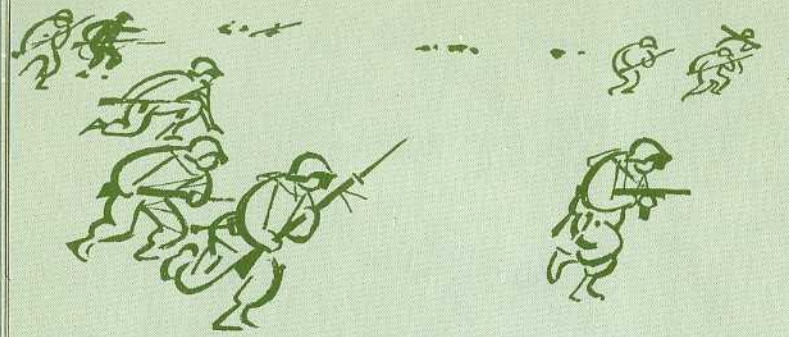
食糧、武器、弾薬の供給は、必要に応じて諸国から組織的に行なわれる。われわれに重装備を提供し得る空中輸送の組織をつくることも考えられる。

このようにして、わが解放軍の勢力下にある地域は広がっていく。そして、至る所で人々が敵に反抗し始めるにつれて、われわれの情報網はその密度を増してくる。占領軍のこうむる打撃はますます増大し、わが解放軍は遠く離れた基地から大規模な連合作戦を展開することも可能になる。新しい本格的な軍隊機構も形を成してくる。

まだ敵に占領されているわが国の他の地域においては、受け身の形での防衛活動がより激しくなり、住民は、敵の弾圧に無駄に身をさらすことなく、占領軍の活動を麻痺させるためできるだけのことをする。その結果、占領軍は至る所で住民の沈黙にぶつかり、徴発活動はうまくいかない。今や占領軍の機構の歯車には、至る所に砂が入れられたような状態になっている。工場においては、徴用された労働者が、ワザとゆっくり仕事をする。どこにもこれといった欠陥が見つけられないにもかかわらず、占領軍にとってはすべてのことが、うまく運ばないという状態を呈する。

特別攻撃隊の襲撃が、その隠れ家から、常に、占領地域のより深い所に向けて行なわれる。彼らは捕えられた人々を解放し、貯蔵物資を獲得し、物資の輸送を阻止する。

最後の対決

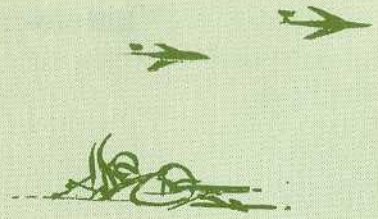


われわれは、一般的な戦闘の再開を覚悟せねばならなくなった。戦っているのはわれわれだけではない。ヨーロッパにおいて、今やその様相を変えたこの戦争には、大量の軍隊が巻き込まれているのだ。幾つかの外国も解放され、反攻作戦が拡大している。長かった小康状態の後、われわれは再び、ほとんど全ヨーロッパ大陸を揺り動かす動乱の渦中にある。

われわれは、撤退しつつある軍隊に巻き込まれ、押し流されてしまうのか。わが国は、強大国の作戦の舞台になろうとしているのか。われわれの友好国軍隊は、敵を追い払い破壊するために、われわれの町を爆撃せざるを得ないような事態に追い込まれるのか。解放軍の部隊は、わがレジスタンスの部隊と接触を求め、一緒になって決定的な打撃を敵に与えようとしているのか。

いずれにせよ、新しい試練と新しい被害を、予期し、覚悟しておかねばならない。いま一度、地下室と避難所の生活がやってくる。民間防災組織は再び忙しくなる。

解放！



解放の夜明けが、われわれの山々の上に輝く日が来る。

多くの試練、哀悼、破壊、犠牲、そして涙、その後に、ついに確信をもって未来を見つめられる日が来る。

長らく待ち望んできたこのときにおいても、国民は、無益な損失を避けるために、あせりと怒りを抑えて、命令されたこと以外は何も企ててはならない。選ばれた時刻に、合法政府と連絡をとりつつ、わが総司令官は、必要な命令を下し、説明をするであろう。

周到に作成された計画が実施に移される。どの州庁所在地においても、それぞれの使命を帯びた指導者が現われ、彼らがわが軍隊を勝利へと導びく。

彼らは、敵の組織を破壊するためにはどこを叩けばいいか、どの通信網を破壊すべきか、どの人物を逮捕すべきか、どの通路は手をつけずに残しておくべきかなどを、正確に知っている。国民は彼らの命令に従うべきで、自分勝手に制裁を加えるようなことをしてはならない。敵側の協力者と見られていた者の中にも、われわれの仲間がいるし、おそらく、彼らは、最もよくわれわれの大義に奉仕したかもしれないからである。

明日こそ、われわれは解放される！

これまで読者の前に、起こり得る戦争の姿、考えられる戦いの幾つかの様相を、次々と展開して、警告を発してきたのは、われわれが場合によっては耐え忍ばなければならなくなる現実に、われわれ一人一人が慣れておくためである。前もって充分に警告されていれば、われわれに襲いかかる可能性のある厳しい試練の重みに、われわれが押しつぶされてしまう危険は、それだけ少なくなるだろう。

われわれは、また、平和時に先見の明を欠くことの危険についても考えてみた。平和だからといって充分な用意を怠っていたならば、不意に動乱に巻き込まれたとき、われわれは反撃する力を持たないかもしれない。歴史を学ぶとき、われわれは、楽観主義に対して警戒的にならざるを得ない。楽観主義を信じすぎると、結果的には、何らの防禦手段も持たないまま、侵略者の手にゆだねられてしまうことになりかねないからである。

歴史は、また、われわれに、あらゆる戦争は、いつかは終わるものであり、決して将来について絶望すべきでないことを教えている。

健全な現実主義によって、われわれは、戦争の見通しについては、最悪の事態を予想しておくほうがいいことを知っている。そこで、われわれは、みずからの身を守るために必要な、欠くべからざる処置をとるのである。それは、また、われわれの後に続く子孫のためでもあるのだ。

万一のための知識

避難所の設備および備品
医療衛生用品
緊急用の資材
二週間分の必要物資
二ヵ月分の必要物資
だれが協力するか？　どこで？

避難所の設備および備品

(56頁参照)

横になったり坐ったりできる設備
スポンジ・マットレス、または、
エアマットレス
毛布、寝袋、シーツ
着がえ用の下着、衣服
必要材料を並べる棚
手動式の換気装置
電話、トランジスター・ラジオ
予備電池
アンテナ線数メートル
避難所内で使える料理道具
身体を洗う設備
簡易便所
脱臭剤
水(蓋つきの容器、ビンに入れる)1人当り30リットル
手押しポンプ
防火用水容器
消火用の砂
独力で脱出するための道具
　シャベル、つるはし、テコ、おの、のこぎり、
　ハンマー、のみ、手袋など
医療衛生用品(303頁参照)
汚染された衣類の入れもの
次のような雑品：
　皿、茶わん、食事用具、紙ナフキン、
　罐切り、せん抜き、懐中電灯と予備電池、
　ろうそく、マッチ、カレンダー、裁縫用具、
　筆記用具、トイレット・ペーパーと紙袋
消毒剤、清掃用具、ごみ箱、新聞、
聖書、書籍、おもちゃ、室内遊戯用品、
幼児用の哺乳器、ビン、紙製おしめ、
ベビーパウダー、ベビーオイル
救急必要物資(305頁参照)

医療衛生用品

(135頁参照)

包帯用材料一式(ブリキ箱またはプラスチックの袋に入れ、乾燥状態に保った手当用具(2～3人ごとに))をそなえた救急箱	幅広い繃帯　3巻き 5㎝×10㎜のガーゼ　2巻き 同　繃帯　2巻き 8㎝×2.5㎜のゴム帯　1巻き 100㎝×100㎝の三角布　2個 蓋つきのボール箱　1個 消毒ガーゼ 消毒脱脂綿 ばんそうこう 生理バンド ホックと安全ピン　5個
	ピンセット、はさみ、 血管圧迫用ゴム管、体温計、 針金つきの副木、傷口に詰める脱脂綿
右のような処方箋なしで入手できる薬	痛みどめの錠剤 軽い鎮静剤 悪寒、下痢、便秘などをとめる薬 傷口の消毒薬
その他	必要に応じ、医者の処方をもらって、糖尿病患者用のインシュリン、強心剤など

緊急用カバン

（109頁参照）

旅行用カバンに入れておくもの	丈夫で温かい防水服 着がえ用肌着、ソックス、長靴下 帽子、スカーフ、手袋（放射能よけ） ハンカチ、短靴、スリッパ 毛布、寝袋 化粧用具、トイレット・ペーパー 防毒マスク、保護眼鏡、予備の眼鏡 懐中電灯と予備電池 携帯薬品箱 裁縫用具、紐、靴紐、 安全ピン、ろうそく、マッチ 調理用具、キャンプ用の飯ごう 水筒、ポケットナイフ、食事用具 トランジスターラジオと予備電池 プラスチックの布
救急用物資２日分（密封すること）	保存用食料品 例：ラスク、乾パン、インスタント・スープ、 罐入りチーズ、乾し肉、肉や魚の罐詰、 チョコレート、砂糖、紅茶、 インスタント・コーヒー、 乾燥果実、粉ミルク、 コンデンス・ミルク
小さな書類カバンに入れるもの	身分証明書、AHVカード、配給カード、保険証、 健康保険証、職業証明証、 現金、有価証券、 民間防衛の本 子供のための赤十字の身分証明書

二週間分の必要物資

（常時避難所におく）

戦争と放射能汚染に備えて。	保存に耐える食料品 例：乾パン、ビスケット、ラスク 肉、チーズ、魚、果物の罐詰、乾し肉 チョコレート、 朝食の飲みもの、インスタント・コーヒー、 紅茶、コンデンス・ミルク 乾燥果実、葡萄糖、 ミネラルウォーターまたは 飲料水（１人１日当り２リットル） 浄水剤 雑用のための水（１人１日当り２リットル）
	避難所の必要物資は、ブリキ製の箱またはプラスチックの袋に入れ、湿気や放射線から保護する。 ときどき動かす。また、一定の時期に新しいものと取りかえること。 災害の場合の必要物資のリストは、さらに目下、検討中である。然るべき時に新聞、ラジオ、テレビを通じてお知らせする。

2ヵ月分の必要物資

今すぐ買って、一定の時期ごとに取りかえること。

なぜ？	何を？	どこへ？	どのように？
個人的の貯えは：以下の場合に備える 輸入が妨げられた場合、動員または戦争のため国内の物資供給が混乱した場合 配達の禁止または販売の凍結のときから、物資供給が開始されるときまでの間 万一の用心のため避難所に入った場合 危急が去った後、避難所を出てから住民への物資の供給が再び確保されるまでの間	一人当りの基礎的必要物資 砂糖　2キロ 脂肪、食用油　2キロ 米　1キロ めん類　1キロ	乾燥した、 涼しくて暗い場所 清潔で風通しのいい場所	保存用の箱、ビン、カンの中。 当初の包装のまま。 布袋の中。
		政治情勢、軍事情勢の悪化したときは、地下室または避難所	黒っぽい紙で包んだビンの中に入れる。
	補足的な必要物資： 小麦粉、片栗粉、 からす麦、大麦 とうもろこし、豆類 ココア、乾パン インスタント・コーヒー 肉、魚の罐詰、チーズ 果物、コンデンスミルク インスタント・スープ	乾燥した、 涼しくて暗い場所	当初の包装のまま。 ビン、箱、布袋の中。
		政治情勢、軍事情勢の悪化した場合は、地下室または避難所	当初の包装のまま、すの子の上に置き、ときどき位置を変える。
	石鹸 洗剤	乾燥した場所	食料品のそばに置かないこと。
	燃料	都合のつく場所	消防法の規定を守る。

連絡または登録場所	だれが？	どこで？	養成期間など	手　当
民間防災組織			新しく編入された者 3日間 幹部 各職務につき12日以内 新しく編入された者の仕上げ課程　毎年2日間 幹部の仕上げ課程 4年ごとに12日以内	職務に伴う手当 得られるはずの収入を補償する。 12日を超える勤務の場合は男子に対しては兵役期間の縮少。 軍事保険
任　意　的	60才以上の男子 16才から60才までの女子 16才から19才までの青少年			
強　制　的 兵役または補助的勤務に服す義務をおわない者の場合 兵役から解除された者または戦闘行動を免除された者の場合	20才から60才までの男子			
自警組織				
住宅自警団は、市町村の民間防災組織の事務所への登録	女子	家庭で		
企業自警団は、雇用主への登録	成年男子、青少年	企業で		
地域防災組織は、市町村の民間防災組織の事務所への通知		各市町村で		
司令部、情報班	成年男子および女子			
警報と伝達	女子、成年男子および青少年			
戦時消防班 工　事　班 保　全　班	成年男子			
衛　生　班 被災者救助班 核・化学兵器対策班 補　給　班	女子 成年男子および青少年			
運　送　班	成年男子			

連絡または登録場所	だれが？	どこで？	養成期間など	手　当
スイス赤十字 登録： スイス赤十字　3001　ベルン タウベン通8 （電）031/22　14　74 赤十字組織 赤十字司令部の分遣隊 赤十字支部 赤十字病院の特別出先機関 赤十字の地域的出先機関	18才より45才までの女子	軍の衛生施設 地域防災隊の衛生部	職業看護婦、専門家の養成 （病院の助手、放射線科の助手など） 赤十字の病院付助手は： 理論課程　28時間 病院実習　2週間 サマリテン救急看護婦 看護課程または サマリテンの課程　30時間 幹部の養成	俸給 得られるはずの収入を補償する。 軍事保険
	補助的勤務の成年男子	軍の衛生施設	補助的勤務のワク内における養成	俸給 得られるはずの収入を補償する。 軍事保険
	17才より60才までの女子	民間病院および救急病院での協力	職業看護婦、専門家の養成 病院付助手：理論課程　28時間 病院実習　2週間	活動従事の場合 日給 得られるはずの収入を補償する。 保険
スイス・サマリテン(救急看護)組合 登録： スイス・サマリテン組合 4600　オルテル マルタン－ディステリ通27 （電）062/21　91　33	16才以上の男女	各家庭で。 事故の際の応急手当 隣人、年配者の援助	人命救助の課程　10時間 サマリテンの救急看護課程　30時間 家庭内の病人看護の課程　30時間	無報酬 （保険）
	16才より60才	民間防災のサマリテン病院：	民間防災参照	民間防災参照
	18才より45才	赤十字のサマリテン病院：	赤十字参照	赤十字参照

連絡または登録場所	だれが？	どこで？	養成機関など	手　当
女性の補助的勤務 登録： 女性の補助的勤務係 3011　ベルン ノイエンガッセ通3 （電）031/67　32　73 可能性ある職種 事務職 軍人家族の援助係 防空監視係、信号係 伝達係 警報班 野戦郵便係 伝書鳩係 衛生係 修理・物資係 料理係	19才より60才までの女子	総司令部および軍の部隊	入門課程　20日間 補完課程 年間最高　13日間 平時において合計　91　日 能力に応じて幹部課程における補完教育（昇級）	俸給 得られるはずの収入を補償する。 軍事保険
農婦への援助 耕作者への援助 登録： 農民連合にて、または新聞の呼びかけに応ずること。	15才以上の女子 成年男子、青少年	農場で	畑仕事の援助 家庭内の仕事の援助	保険 日給

訳者あとがき

第二次大戦後しばらくして「太平洋のスイスになれ」という言葉がわが国でもてはやされた時代がある。われわれはその言葉に、将来の日本に関するすべての夢を託したともいえよう。この言葉を耳にして、われわれが想い浮かべたスイスのイメージは、美しいアルプスを見上げる牧場であり、羊飼いの少年少女の恋物語であり、そして何よりも、戦乱の歴史をくり拡げたヨーロッパにおいて、150年以上にわたり平和と安全を享受してきた国であった。

このイメージはそれ自体決して誤まりではない。しかし、われわれが平和愛好国スイスを語る際、どういうわけかスイス国民の平和を守るための努力、国民一人一人の大変な負担とこれに耐えぬく気迫という現実には目をつぶり、ともすれば、かかる努力によってはじめて開花した平和という美しい花にのみ気をとられてきたきらいがないだろうか。

本書は、スイス政府により、全国の各家庭に一冊ずつ配られたものである。本書を一読された方はすでに気づかれたように、内容は相当ショッキングである。しかし、それだけに訳者は、かかる書を一般家庭に配布したスイス政府の英断、同胞の安全を最大限に考慮する責任ある態度に心を打たれ、また、全家庭でこの書が読まれ、その内容に即してまさかの準備がなされているというスイス国民の平和への執念のすさまじさというようなものさえ感じた。

本書を訳出しながら特にわが国との比較において考えさせられたことは少くない。

まず第一に、真に平和を望むものは、平和を守るための努力を惜

しんではならないということである。単なるスローガンで平和を守ることは不可能である。いかなる物を得るにも代償が必要であり、代償なくして物を要求できるのは親に甘える子供か、はては通行人に手を差しのべる乞食くらいのものである。われわれ1億の日本人ははたして前者のごとく平和をねだることにするのか。または後者のごとく人の憐れみに期待をかけるのか。それとも堂々と代償を払ってわれわれの平和を守るのか。これは、結局、日本の進路を定める日本人一人一人の選択にかかっているともいえよう。

第二に、いわば先憂後楽という姿勢においてわが国における場合とは基本的な違いがある。スイスは陸続きながらも周囲を友好国に囲まれ、本書のはしがきにもあるように、今、具体的な戦争の脅威に直面しているわけでは決してない。むしろ、世界各国との友好関係を求めるスイスの外交政策を通じ、その平和外交は世界的に有名である。しかし、スイス国民は、国の防衛というものはいざ具体的な脅威に直面してから準備するのではとても間にあわないということを、歴史の教訓として学んでいるようである。また、常にあらゆる戦争の危険に対処しうる体制を維持することこそ150年間にわたりこの国の平和と独立を守ってきたものでもある。「最悪の事態」に備えるという発想は本書のいたるところにでてくる。

この点、どうもわれわれ日本人とは基本的に考え方が逆のようである。われわれ日本人はどちらかといえば「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ……」というのが好きであり、大戦中はもちろん、戦後においても、公害の蔓延、毎年訪れる台風の被害等にもみられるように、すべて目の前に起ったかせいぜい起りつつある危険には対応策を講ずるものの、将来起りうる危険、起るかもしれない危険にいたってはまったく無頓着である。

科学的根拠に基づく有力な説によれば、あと8年後から関東地域は大震災に見舞われる危険があるそうだ。しかし、これに対する対策についても同じことがいえる。関東大震災の規模のものに見舞われると、今の東京はまったくお手上げであることは責任者が認めている。大震災にともなう大火災、避難場所を求め右往左往する一千万人の都民。社会的混乱、まさに考えるだけでもあびきょうかんの地獄図である。悪夢が現実となる前に、せめてスイス並みの避難体制の確立をと願うのは訳者が本書に影響されすぎた故であろうか。しかし、被害を最少限度に食いとめ、少しでも多くの人命を救うにはそれしか方法はないと思うのだが……。

第三の点は、わが国の安全保障論でもよく問題とされる「何を守るのか」という点である。スイスは守るべき価値として、物質的な財産はもちろんのことだが、より基本的には「自由」を根幹とする社会体制を重視している。

ここで「自由」は自分達のよりよき社会を築いていくことができるための不可欠な要素として把えられている。スイス人がスイスの社会を愛しそれぞれの時代の要求に応じ社会の改善に努めるためには自由な発言が許され、いかなる意見も抑圧されず、自由に政党が結成され、そして自由に政治活動が認められねばならないということである。その裏には、かかる基本的な自由さえ保障されていれば、あとは、スイス国民の責任においてその能力に応じ、最も賢明な選択をしていけるという自信がうかがわれる。「自由」の把え方は、もはや、ただ言いたいことを言い、好きなことをするというような次元の低いものではなく、時代の流れに応じて社会の変革をもたらす最良の手段、社会的進歩を獲得するための最善の方策として考えられているようだ。したがって、かかる「自由」を否定、ないし大はばに制限する左右の全体主義に対しては、断固としてこれと対決する姿勢を示しており、「自由」の思想を否定するものに対しては、常時、警戒を怠らない。けだし、自由主義の最大の弱点は、自由主義を否定する意見にも一定の限度内で言論の自由を保障せねばならぬという点であろう。

第四の点は、いわゆる「何から守るのか」すなわち、脅威の問題である。前述したように、目下スイスは現実の脅威には直面していない。しかし、スイスでは現実の脅威がないから守りを備える必要

はないという議論はないようである。むしろ自然の災害同様、戦争の脅威はこちらの意図と関係なく生れうるとの認識が徹底している。戦争をしかける可能性はわが国と同じく最初から除外され、戦争はしかけられるものとしてのみ考えられている。脅威とは、力と意思によってもたらされ、また力がある限り意思は何時変るかもしれないのであるから、潜在的な脅威は常に存在する。潜在的な脅威が顕在化したときには実はもう遅いのであり、脅威を現実のものとしないためには、いざという場合にいかなる危険にも対処しうる体制をとっておくことが、最も効果的であるという判断であろう。第二次大戦中、ヒットラーをしてついにスイス攻撃を断念せしめた実績が、何よりも雄弁にこの思想の正しさを証明しているといえよう。

第五の点は、「いかにして平和を守るか」という方法論であるが、この点でこそ、わが国とスイスの防衛体制との最も大きな差が認められる。とかくわれわれは、防衛というと、軍事問題を中心として考えがちであるが、スイスでは、近代戦争は全面戦争であり、これに対しては全面防衛が必要であるとされる。全面防衛とは、政治、経済、心理面での防衛に、民間防衛および軍事防衛を加えたものである。「レジスタンス」の項に示されるように、たとえスイスが軍事防衛に破れ、占領されても、心理的防衛により必らず最後の勝利を得られると考えている。ただし、その場合でも、最終的な段階では武力の裏付けがあってはじめて可能としている点で、チェコ事件の際、わが国の一部で唱えられた非武装抵抗論とは本質的に異なるものである。

第六の点として、感銘を受けたのは、スイス国民の運命共同体としての意識と、その共同体内部にみなぎる社会的正義、隣人愛の精神である。それは民間防衛を通じての相互の助け合いにも示されているが、特に戦争の危機に直面した場合の経済政策において最も明らかである。国家は権力を行使して市場経済に介入し、一部の富める者が物質の買い占めを行なうことを防ぎ、経済的余裕のない人々の必要物資を確保してこれを保護しようとしている点である。富める者、権力のある者のみが生き残り、勝手に欲望を満たすようなことでは、全面防衛も国民の自由もすべて空念仏になってしまうからであろう。

わが国は第二次大戦後、二度と侵略戦争をしないと誓い、平和に徹することを国の最高方針として今日にいたった。その点で、16世紀頃以来、侵略政策を放棄し、平和愛好国となったスイスと歴史の長さこそ違え同じ立場にある。もちろん、東京都の人口にみたないスイスと1億の国民をもつわが国との間には、地理的にも、経済的にも、また国際社会における生き方にも、大きな違いがあるのは事実である。

しかし、一方の国では平時から、戦時に備えて2年間分位の食料、燃料等必要物資を貯え、24時間以内に最新鋭の武器を具えた約50万の兵力の動員が可能という体制で平和と民主主義を守り、他方の国では、軍事力を持つことは民主主義に反するというような議論が堂堂となされているのは、まことに奇妙といわざるをえない。

あらゆる危険に備える平和愛好国と、いかなる危険にも目もくれない平和愛好国！

英国の民間防衛研究所の機関紙は本書の書評において「第三次世界大戦が勃発しても生き残る国民はスイス人だけであろうし、彼らはまたそれに値いする」と述べている。

「戦争に備え、災害に備え」という指示は他方アジアにおいても、わが隣国の指導者によっても出されている。同じ指導者が「戦争に備えず、災害にも備えず」ひたすら平和に徹するわが国を、軍国主義国家と称するのはまたどういうことであろうか。

いずれにせよ、平和を愛し、平和を守りたいと思う日本人が一人でも多く本書を読み、共に考えてくれれば訳者としてこれ以上の幸せはない。最後に、翻訳の未熟さを読者にお詫びして訳者あとがきとしたい。

民間防衛

●

1995年3月5日　新装版第6刷

編著……スイス政府
訳者……原書房編集部
発行者……成瀬恭
発行所……株式会社原書房
〒160 東京都新宿区新宿1-25-13
電話・代表03(3354)0685
振替・東京5-151594

本文組版・印刷……株式会社同美印刷
カバー印刷……株式会社同美印刷
製本……株式会社豊文社

ISBN4-562-02659-6 ©1995, Printed in Japan